

6. 「私たちの教会 — 神の教会教理入門 —」

ジョン・W・V・スミス著

石丸暁子訳

山口昇監修・校訂

(注) ジョン・W・V・スミス著の論文は、翻訳され、1991年1月31日付で日本神の教会連盟から小冊子として発行されている。ここでは、太田良一師が一部削除し要約して掲載しています。

目次

はじめに

序

第1章 神の教会改革運動 — その始まり —

第2章 神の教会の歴史的先駆者

第3章 信仰の基礎としての聖書全巻

第4章 他のキリスト者達と共有する基本的信仰

第5章 救い

第6章 聖さ

第7章 神によって制定された共同体

第8章 統一された世界的共同体

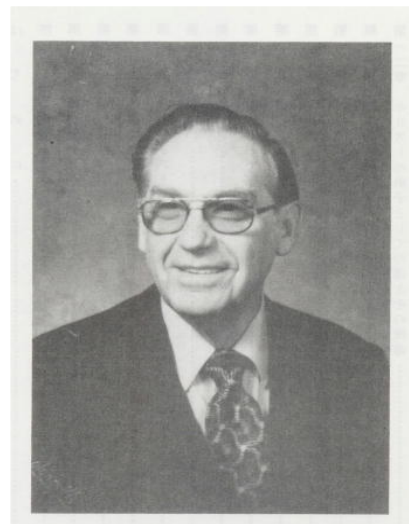
第9章 キリスト教の礼典

第10章 神の肉体的いやし

第11章 終末論（最後の事柄）

第12章 キリストの弟子としての道とその使命

第13章 成長する信仰



ジョン・W・V・スミス博士遺影

はじめに

神の教会改革運動は発足以来すでに約110年を経て、今日では米国だけでなく、世界の80数か国において、活発な活動が続けられています。わが国においても1908年に矢島宇吉牧師によって、武蔵野の一角において活動が始められて以来すでに、80数年を経過しています。

主はその伝道の働きを祝してくださり、多くの教会が生み出されて来ましたが、残念なことに、この働きの歴史や教理的特色が、神の教会の内部の人々にも、外部の人々にも、あまり知られないままに、経過して来しました。このような状況の中で、神の教会の100周年を記念して米国で出版された『ザ・ファースト・センチュリー』を読んだ前連盟委員長故今野孝蔵牧師は、これこそ日本の神の教会にとって、最も必要な書物であると確信し、自費出版しました。この書物は日本語では『神の教会改革運動の百年史』という題で多くの人々に読まれ多大の貢献をしました。しかし、上下二巻で千ページを超える大冊であったため、一般信徒の方々にとっては、読み通すことがなかなか困難であり、もう少し簡単に読める入門的な本が欲しいという声が聞かれました。そんな時に、まさに本書が出版されました。

早速連盟委員会において翻訳出版することを決定し、作業にとりかかり、最初は連盟の機関紙である「神の教会」の誌上に、毎月1章の割合で発表されました。翻訳の完了後、単行本としてまとめることになりましたが、内外の用務に追われ、延引いたし、ようやく出版の運びとなりました。これまでの一切を主が導いて下さったことを、心から主に感謝し、御名を崇めます。

本書の著者ジョン・W・V・スミス博士は米国のインディアナ州アンダーソンにある神の教会立のアンダーソン大学神学部において、教鞭をとられた、教理史専門の学者ですが、深い内容をきわめて平易な用語でわかりやすく説明しておられます。ここにも、長い間学生を教えて来られた先生の経験が生かされていると思われまします。先生は本書の出版後間もなく天に召されましたので、本書が先生の最後の作となりました。主が本書を日本神の教会の発展のために用いて下さると同時に、日本の他の教団、教派の方々に神の教会を理解していただくための良い助けになるように祈っております。

最後になりましたが、本書の翻訳のために忙しい中を労して下さった石丸暁子姉（群馬県立女子大学文学部英文学科助教授）および編集のために労して下さった太田良一牧師（深谷神の教会）に心から感謝し、主がその労苦に報いてくださるよう祈ります。また祈りと献金をもってこの計画を支援して下さい、国内国外の皆様方に心から感謝いたします。

すべての栄光が主の御名に帰されますように祈りつつ。

1991年1月

日本神の教会連盟

委員長 山口 昇

序

「神の教会」と、他の何百といういわゆる教派とか、教団という名で呼ばれているキリスト者のグループとの相違は何ですか、と日本のある神学生から質問を受けました。彼は牧会者となるための導きを真剣に求めていました。日本は、あらゆる教派を合わせても、キリスト教の信者の数は、人口のわずか1パーセントにしか達していません。この日本の神学生にとって、彼の質問に対する答えは、大変重要なことでした。彼は、伝道する上で、最も有利な条件を得ることに、大きな関心を払っていました。彼は、大きなグループに入る方が、もっと有利なのではないか、と考えざるを得ませんでした。

これは単にこの神学生だけの質問ではありません。世界のいたる所において、神の教会について初めて聞いた人々、あるいは神の教会改革運動について殆ど知らない人々によって尋ねられている質問なのです。奇異に思えるかもしれませんが、これは、神の教会運動自体に属している人々によって、最も良く尋ねられる質問なのです。神の教会運動に属している人々は、自分達が基準にすることが出来る公式な文書がないので、自分達と他のキリスト者のグループと区別したり、自分達の特色ある教えを的確に表現することが出来ないのです、当惑しています。本書が意図しているのは、この様な事柄のためなのです。すなわち、神の教会運動の主な特徴を明確にすることと、その神学的教えと、実際生活の聖書的基盤を検討することが目的なのです。このような研究のために必要な準備段階として、いくつかの点を前もって述べたいと思います。

先ず、神の教会における、神学の重要性について述べたいと思います。神の教会の歴史全体を通じて、この運動が、常に主張し、かつ実践してきたことの中心は、教理に置かれていました。公式に表明された信条を持たなかったという事実は、決して神学に対して、無関心な態度をとってきた、という意味ではありません。実際には、全くその反対なのです。神の教会は、改革運動であり、その焦点となったのは、人が作り上げた信条や、教派主義に陥らず、純粋な聖書の教えに戻る、ということにありました。神のことばが語っていることに、主要な関心が払われました。この運動の初期の指導者達は、「みことばの真理」について、よく語っていましたし、聖書から受けた、「光」を、人々に分け与えることに、熱心に励みました。教理がこの運動を生み出したのです。健全な聖書の教えを保つことによるのみ、神の教会はこの世においてその使命を果たすことが出来るのです。

第二に、本書は、組織神学の教科書となることや、キリスト教教理を完全に再検討することを意図したものではありません。例えば、神、人間の人格性、キリストの人格とみ業、三位一体、等の基本的でかつ重要なキリスト教の主題に関しては、ごくわずか、あるいは、附随的な言及しかなされていません。神の教会運動で強調されているこれらの、あるいは他の多くの教理は、歴史的、正統的キリスト教という広い基盤の中で理解されている聖書の真理と、基本的に一致しているので、これらの一般に支持されている教えを、特に「神の教会」の教えとして取り扱う必要がないからです。しかし、このような教理を、本書で取り扱わなかったからといって、これらの教理が重要ではなく、附随的なものだと言っているのでは決してありません。キリスト教の信仰の、聖書的で、基本的な教えは、すべて、神の教会においても強調されてきたのです。

第三に、神の教会運動において特に強調されてきた一連の教理があり、それらはいずれも聖書的であり、歴史的、正統的な教理であることが、一般に認められています。本書が特に焦点を置いているのは、これらの特別な教理なのです。ある場合には特に量的な面が強調されています。すなわち、ある特定の教えに対して特に注意を払うということです。また他の場合には、特に、質的な面が強調されています。すなわち、ある教理に対して加えられた、特別な意味や適用が、聖書的に健全なものであり、今日の世界において、キリスト教信仰を有意義なものとするために適切であると考えられてきたからです。神の教会の神学的立場を「見分ける」ものとして、ある程度重要な特徴を示す八つの教理が、選ばれてきました。

第四に、本書で取り扱っているこれら八つの教理は、神の教会に「特殊な」ものとしてでなく、他のグループと見分けるものとして述べられている、という事実注目するのは大切なことです。これらの教理のいずれも、神の教会のみにある、特殊なものでないことは明白です。これらの教理のどれも、他の多くのキリスト者のグループによって、強調され得るものでありますし、いくつかのグループは、これらの各々の教理を、神の教会と同様に、解釈するでしょう。そのことは、これら八つの教理が、全くキリスト教的であり、全てが、聖書に基づいているという理由によるものです。しかしこれら八つの教えを組み合わせ、各々すでに指摘したように、解釈するとき、神の教会の立場が特殊で、かつ重要なものとなるのです。

最後に、神の教会は、聖書そのもの以外には、教理を「公式に」述べたものを持っていない、ということに注目すべきです。したがって神の教会の特色としての教理を選ぶべきかという選択も、私自身によるものであって、何らかの権威あるグループによって、そのように認められてきたものではありません。さらに解釈それ自体も、公に認められているものではありません。その解釈は、神の教会運動と長い関わりを持って来た、「生粋の子」である私のものです。それは、聖書的「真理」として、一般に受け入れられ、教えられて来たものを忠実に、明瞭に、述べようとする試みです。たとえそうであっても、神の教会の全ての神学的文書に関してと同様に、これは、一人の人間の意見にすぎません。ある人々は、ある点に関して異議を唱えます。しかし、それは、神の教会の特質の一部です。

信条に関しては、「聖書全体」を基盤とするというグループにおいても、公式な解釈を表明するわざを進めるに当っては、強調点と、その解釈に関して、かなりの柔軟性が残されているにちがいません。このように、異なった意見をもったままでもなおかつ、主にある兄弟、姉妹として、良き交わりを維持していくことが可能なのです。

このような開放性と、柔軟性を有している立場にもかかわらず、「神の言と共に生きてきた」一世紀にわたる経験が、この運動に独自性と、目的を与える点を、選び出したのです。初期のメッセージに忠実であるこの運動は、「神の教会」の聖さと一致を美しく、力あるものとして回復しようと模索し続けています。この論文の各章が、幻をより輝きのあるものとし、使命をより明らかにし、証しをより広範囲に、しかも力強く証していくための助けとなるように祈っております。

ローマ人への手紙 15章 15節、16節

1984年11月

ジョン・W・V・スミス

第1章 神の教会改革運動 —その始まり—

聖書の引照箇所

イザヤ書 48章 17～20
 イザヤ書 52章 8～11
 エゼキエル書 20章 34、41
 ゼカリヤ書 14章 6～7
 コリント人の手紙第二 6章 14～18
 ヨハネの黙示録 18章 1～5
 輝く時代は明けそめて
 光はややに現われぬ
 雲れる日々は去り行きて
 夕べの光輝かむ
 贖われし者は純白の
 光り輝く衣着て
 ふるさとシオンを目指しつつ
 歌いつ、踊りつ帰り来ぬ
 明るいたべの光の中を

いつどこで

神の教会改革運動は、アメリカ合衆国の中西部地域で始まりました。最初の出現は、インディアナ、ミシガン、オハイオ、そして、イリノイの諸州でした。運動が始まったのは、1880年と一般には伝えられています。しかし、入手可能な証拠によると、初期の指導者達はすでに1877年、または1878年にはこの運動を始めようという見通しを持っていた、と言っても良いようです。しかし、運動を開始するための最初の明白な行動は、1881年10月にインディアナ州のビーバーダム附近の小さ村で集会が行なわれるまで起こされませんでした。この教会が再生させられる運動は、アメリカに源を発したのですが、それは、すぐに、ヨーロッパ、アジア、アフリカへと拡がりました。多くの霊的に敏感で、熱心、かつ勇気のあるクリスチャンたちが、メッセージを聞いたり読んだりして、熱意のこもった反応を示しました。多くの人々は、次のように言いました。「あなたが語っていることは、私が長い間信じていたことです。私は、このように考えておられる方が他にもいる、とは知りませんでした。この真理のゆえに、主に感謝します。」このように、だれかひとり、この運動の創始者として揚げることはできません。しかし、その運動の発展に際して、非常に重要な役割を果たした数人の初期の指導者がいました。これらの人々の中には、アメリカでは、ダニエル・S・ウォーナー、ジョセフ・C・フィッシャー、A・J・キルパトリックがいました。これらの人々と共に、数年後に、このメッセージに賛同したインドのA・D・カーン、日本の矢島宇吉の名を加えるべきでしょう。この人々と、他の大勢の人々は、新約聖書の教会の概念を、再生させようという幻を抱いていました。彼らは、自分達が伝えているメッセージが重大な意義を持っていることを自覚していましたので、自分たちが、人間的な注目を浴びることがないように、細心の配慮をしていました。彼らは自分たちの活動に対する反応が拡がっていくのを、神の業であると信じ、自分たちの指導によって産みだされたものだとは思いませんでした。彼らは、この運動の精神を伝えるために、あらゆる機会を捕えました。

ウォーナーとは、どんな人物か

初期の指導者の中で、最も良く耳にする者は、D・S・ウォーナーです。彼の記録を一見すると、彼が、「改革者」というイメージからは程遠い人物であったことが解かります。彼は、反抗者、野生的な目をした熱狂的信者ではなく、誠実な精神を持ってキリスト教の牧師を14年間務めた人でした。彼は、ジェネラル・エルダーシップ・オブ・ザ・チャーチ・オブ・ゴット・イン・ノース・アメリカ（ワインブレナー派）から免許を授かり、オハイオ州の数ヶ所の教会の牧師として奉仕していました。彼は、またネブラスカ州の国内宣教師として、2年以上を過ごしていました。彼は伝道者として認められていましたので、これらすべての奉仕の業に成功していました。

ウォーナーは、オハイオ州の田舎で育ちました。彼は23才頃なって初めて、宗教について、真面目に考えるようになりました。1865年、2月のある夜、田舎の学校の校舎で開かれた、リバイバル集会に出席しました。彼は、前へ進み出るように、という招きに応じ、神に、自分の生涯を委ねました。その時以来、霊的真理をまじめに探究するようになりました。

ウォーナーは、信仰と、その働きの方法に関し、常に開かれた心を持っていました。当時、あるメソジスト教会と、他の教会の指導者たちによって、聖めの教理が強調されていましたが、ウォーナーは、この教理に強く反対していました。しかし、1877年、この聖めの教えは、聖書によって支持されており、聖霊によって聖められた人々にとっては、聖い生活を送ることが可能であることを確信するようになりました。彼は、聖めを熱心に、説教しはじめました。少し驚いたことには、同じ教派の他の牧師たちは、彼が聖めを強調しはじめたことに、きわめて批判的でした。このことは、いろいろな困難を生じさせ、結局その結果、1878年1月、彼の説教者としての免許が取り消されることになりました。その後しばらくして、彼は、神の教会のインディアナ州北部長老会（エルダーシップ）に所属しました。この小グループは、「聖め」の教えを受け入れました。ウォーナーは、活動的な指導者となり、伝道者、および教会機関紙の編集者として奉仕しました。しかし3年後、彼が真理の概念を拡大していくには、この交わりは狭すぎる、と考えるようになりました。1881年10月、彼は、あらゆる教派的組織との関係を断ち切りました。彼は人間が作り上げた障壁に妨害されずに、全ての、真のキリストのしもべたちと開かれた交わりを持っている、と宣言しました。

運動の誕生

ウォーナーは、この宣言をした時、孤独だったかも知れませんが、まもなく、多くの人々が、彼が考えたと同じ頃か、それ以前から、同様な思いをいただいていたことを発見しました。その後数ヶ月の間に、いろいろな教会の指導者や、信徒の人々が、証しを加えていくにつれて、一つの運動の形をとりはじめました。ミシガン州出身のJ・C・フィッシャーと彼の妻アリー、オハイオ州のA・J・キルパトリック、ミズリー州出身のジェレマイア・コールは、この運動初期の牧師たちでした。キルパトリックは、ユナイテッド・ブレズレンの牧師でしたが、ウォーナー以前から、教派の束縛より解放されていると公言していました。これらの人々や、他の多くの人々は自分たちの理解を鼓舞した、この「教会についての真理」を、遠くかつ広く告げ知らせる活発な「飛びまわる使者」であることを証しました。

人ではなく、メッセージ

神の教会の初期の指導者たちのうち誰れも、新しい宗教的組織を作ろうという意図は持ちませんでした。それは、自分たち自身が、逃れようとした基本的誤りであり、キリスト者の間に、ただ分派を加えるのみでした。彼らは、キリストに対する共通な信仰と、教会全てに対するメッセージを持っているという信念によって結び合わされた、組織化されていない人々の一団にしかすぎませんでした。彼らは、教会の本質に関する「光」を見ていました。彼らは、神の御旨に、全てのクリスチャンが、一つとなって、共通の証しをしなない限り、決して、完全は達成されるものではないという、大きな認識を持っていました。彼らは、キリストによって贖われた人々は、単に正しい生活を送らなければならないだけでなく、お互いに一致して、交わりを保つべきである、と主張していました。これらの基本的原則に基づいて、神の教会改革運動は、そのきわめて重大で、積極的なメッセージを心から渴望していた世界へと船出したのです。

第2章 神の教会の歴史的先駆者

聖書の引照箇所

- ホセア書 14章 1～2
- マタイ福音書 16章 18
- 使徒の働き 2章 41～47
- ローマ人への手紙 12章 1～2
- ペテロの手紙第二 2章 1～3

神の教会は、どのくらい古いか

神の教会改革運動は、1980～81年にかけて、百年祭を祝いました。しかし、これは、神ご自身の教会の第100回目の誕生日を記念するものではありません。神は、アブラハムとの契約を結ばれて以来、御自身のものであると言っておられる「民」を持っておられました。旧約聖書には、この特別な民を、神が取扱われた物語が語られています。神は、その民の忠実さを祝福し、逸脱した行為の故に、彼らを罰し、彼らが神の道から離れて迷っている時、立ち返るように呼びかけられました（ホセア書14章1～2）。

新約聖書は、神が、御子イエスを主なる救い主として地上に送られ、人々が神と新しい関係に入ることを可能にしてくださった、と語っています。このようにして、イエスは、人々が新しい「神の民」となることを可能にしましたが、彼はこの民を教会と呼びました（マタイ16章18）。このように神の教会は、広い意味においては、旧約時代の最初から存在したのです。新約聖書的な意味においては、神の教会の起源は、キリストの時まで逆上ります。

このように教会は2千年の間存続していた、と言えます。さてここで、19世紀後半に起こった改革運動の妥当性を理解するために、このような教会の歴史全体におけるいくつかの重要な点を振り返って見るのが肝要です。

新約聖書の教会

イエスは教会の基礎を築かれましたが、そのための計画は何も明らかにされませんでした。イエスは、明らかに、彼自身の働きを継続する特別な任務は「十二使徒」にあるという印象を与えられました。そこで、残された十一使徒たちは、ユダの代り

を選ぶ作業に取りかかりました（使徒の働き1章15～26）。当時の教会の様子のいくぶんかは、使徒の働き2章40～47に描かれています。クリスチャンたちが、「神を誉め、すべての人からの好意を喜んでいた」（47）、という牧歌的とも言える状況が描かれています。しかし、パウロの書簡と他の文章は、第一世紀の教会が、完全なものでなく、多くの問題を抱えていたことを示しています。これらの不完全さにもかかわらず、新約聖書に描かれている教会は、新しい「神の民」に関して私たちが現在持っている最上の模範です。この神の民こそ、この世で、イエスのみわざを行うために、主が派遣された者たちなのです（使徒の働き1章8）。教会の初期の発展の物語は、全ての時代における教会の信仰、構造、宣教に関する基礎を提供しています。この基本的な意味において、第一世紀の教会は、いかなる時代、またいかなる状況においても、教会の忠実さを判断するための基準なのです。

逸脱、歪曲、離脱

キリスト教の歴史が始まったごく初期の頃、すなわち、新約聖書がまだ書かれている頃から、新約聖書の模範に付加したり、それから離脱していくことが起こってきていました。このような状態は、数百年間続きました。これらの逸脱は、異端と呼ばれ、またその脱落して行く過程は、背教と呼ばれました。何世紀もの間、キリスト教の指導者たちは、ある特定の新しい教えや、その行動が、キリスト教の基本に適合するものであるか否か、あるいは信仰を破壊する方向へ向かわせるものであるか否かを判断するために会議を開きました。

弾圧的教理を主張していた初期の教師たちは、キリストの弟子となるためには、まず、ユダヤ教に改宗すべきであるという見解を示しました。使徒パウロのいくつかの書簡、特にガラテヤ人への手紙の使命は、このユダヤ主義者と闘うことにありました。これ以外にも、ユダヤの律法から解放されるというキリスト教のメッセージは、何をしてもかまわないという許可を与えられたことだ、と教えていた人々もありました。これらの第一世紀の自由思想化たちは、ニコライ派という名で知られています（黙示録2章6、15）。第二世紀に、モンタヌスという名の方は、教会が次第に形式化していくことに悩み、そのことに非常な関心を持っていました。彼は自分自身が、イエスが約束なさっていた、心理を伝える助け主〔パラクレートス〕（ヨハネ14章16～17）、すなわち、聖霊が人間の姿をとった者であると公言しました。これらは、第一、第二世紀頃、教会を脅かしている偽教師たちの中のごくわずかな例にすぎません。

さらにまた、キリスト教に改宗した多くの異教徒たちは、以前はストア主義、エピキュロス主義、プラトン主義、グノーシス主義等の異教徒の哲学に傾倒していた者たちでした。これらの哲学のある面は、キリスト教に適合しますが、他の面は、キリスト教信仰をゆがめてしまいました。真実なものと、偽りとを区別することは、必ずしも容易なことではありませんでした。グノーシス主義は、特に、キリストの神性を支持する一方、その人性は否定していました。使徒ヨハネが述べている「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」（ヨハネ1章14）ということばは、グノーシス主義に強力に反対する言明です。

次の数世紀の間、多くの他の教理上の論争が起りました。その多くは、キリストの性質と、キリストと神および聖霊との関係に関するものでした。これらの論争の中で最も有名なものは、三世紀後半から四世紀前半にかけてのエジプトのアレキサンドリアの長老であった、アリウスの教えに関するものでした。アリウス主義は、御子キリストが父なる神と同等であることを否定しました。その論争は大変烈しく

ローマ帝国の統一が脅かされた程でした。この問題を解決するためにコンスタンチヌス皇帝は、教会会議を召集しました。この会議は、小アジアのニケアで紀元325年に開かれ、アリウスの教えを、異端として退けました。この際の言明は、有名なニケア信条として知られているもので、三位一体の教理を確認し、御子と父なる神の同等性を肯定しました。その後も、正統的キリスト者の基本的定言となりました。その後に行なわれた教会会議も、関連した事項を取扱いましたが、そのいずれも、ニケア信条を否定しませんでした。何かキリスト教の真理であるかを決定し、信条という形で言明を公表する教会会議の方法は、その後の数世紀の間、標準的なものとなりました。

他にも教会の組織と構成に関して、いろいろな問題が持ち上がりました。キリスト教は、当時新しいものでしたから、何ら確立された習慣もありませんでしたし、イエス御自身も、この様々事柄に関しては、何の指導も実際与えてはおられませんでした。初期のほとんどのキリスト者は、ユダヤ人でした。従って、多くのユダヤ教の習慣が導入され、新しい信仰に適応されていったのは、ごく当然のことでした。例えば、ユダヤの会堂制度は、キリスト者たちが、礼拝と学びのために、定期的に集会を持つことの模範となりました。この集会の日は、安息日から、キリストの復活を記念して、週の第一日目へと変更されました。その他の問題は、当時の文化の中で一般化していた習慣や、ローマ帝国の政治的手法から採用されました。ローマカトリック教会の階級制度が発達していったことは、このような自然な適応がなされていったことの良い例です。

このような発展の結果、中世後期までに、キリスト教の教会は、強力な中央集権による、きわめて制度化されたものと化してしまいました。教会は、厳密な信条を有し、完全に秘跡を守るものとなり、聖職権が確立し、入念に組織化され、かつ、世俗の政府と密接な連携を保つものとなりました。第四世紀の後半には、教会は国家の支持を受ける組織となりました。十六世紀までには、教会が改革を必要とする多くの理由がありました。

改革運動

十六世紀にその隆盛を迎える改革運動の前にも、教会を正しい道へ引き戻そうとする多くの試みがありました。第四世紀までには、教会があまりにもこの世と同じようになってしまっている、と考える多勢の人々がいました。この人々は社会から離れ、自分たちの聖さを保持するために、隠者または修道僧として生活しました。この習慣は、修道院運動という形で制度化され、教会によって受け入れられるようになりました。後に、アッシジのフランシスのような中世の神秘主義者たちは、司祭や、教会によって認められている儀式を通してでなくても、神へ直接近づく特権が与えられていると主張しました。こう主張することによって、教会に発展していた聖職主義と、秘跡主義とに挑戦していきました。十二世紀には、「反教會的」数々のグループが発生しました。その殆んどは、南フランスと、北イタリアに起こりました。それらは、カタリ派（純粋なる者）、アルビ派、ワルドー派という名で知られていました。彼らは、信仰による個人の救いを強調し、聖い生活を追い求めました。アルビ派は厳しい迫害に会い、遂に根絶させられました。ワルドー派は、イタリアアルプスに逃れ、今日まで存続しています。彼らは、400年後に起こったプロテスタント宗教改革の最初の先駆者だと見なされています。

宗教改革の偉大な時代は、十六世紀にその最盛期を迎えました。マルチン・ルター、ジャン・カルヴァン、ウルリッヒツ・ツヴィングリ、ジョン・ノックス、

その他の人々が、カトリック教会を支えていた神学的構造を徐々に覆すことによって、ローマカトリック教会の強力な階級制に挑戦して成功を収めました。これらの宗教改革者は、秘跡よりも信仰による義認を、ローマ法王よりも聖書の唯一の權威を、按手を受けた聖職者のみに神へ近づく權威を認めるよりもむしろ全ての信者の祭司制を、宗教的誓願を立てて選ばれた少数の人々だけでなく全てのキリスト者が、自分の職業を神からの召しとして見なす自由を強調しました。多くの歴史家は、この改革運動を「宗教改革」と呼んでいます。ドイツに始まり、西ヨーロッパの他の大部分の地域にも広まり、宗教改革は、全地域の宗教的、政治的構造に、重大な変化をもたらしました。

しかし十六世紀には、他の改革者たちも輩出しました。その人々は、先に掲げた主な指導者たちが十分な改革を行っていないと考えていました。スイスのブレズレンや、その他の人々は、(幼児洗礼よりも) 信者のバプテスマを主張し、回心後に聖い生活をする必要性を強調し、教会はこの世の政治的支配からは自由であり、それとは袖を分つべきであると信じていました、これらの人々はアナバプテスト(再浸礼派)と呼ばれていました。やがて種々の小グループが、オランダの改革者、メノー・シモンズの指導下に集まり、メノナイトとして知られるようになりました。

十六世紀のこれらの広範囲にわたる出来事は、改革の必要性に終止符を打つには至りませんでした。その時以後にも教会をさらに聖書の教えに一致させようとする公然とした目的を持ってさらに多くの運動が発生しました。その一端を述べるのは重要なことだと思います。たとえば、十七世紀に、イギリスでピューリタンというグループが起りました。その主な関心事は、残存しているローマカトリックの習慣を除去し、イギリス国教会を純化することでした。彼らは既存の教会から迫害され、ある者たちはイギリスから去ることを余儀なくされました。これらのピューリタンの多くは、北アメリカの新天地における最初の移住者となりました。急進的ピューリタンのグループは、ジョージ・フォックスの指導下でクエーカー派として知られるようになりました。彼らは、按手を受けた聖職者も、礼典も廃止し、キリスト者の生活に非常に厳しい規準を設けました。

敬虔主義として知られている改革運動が、十八世紀にドイツで起こり、イギリスや、他の国々に広がりました。敬虔主義者たちは、全てのキリスト者のために、個人的な神との交わりの時を回復しようと試み、かつ、キリスト者に、奉仕と、宣教に励むよう勧めました。この「心と手」に新しい強調点を置く運動は、モラビア派や、チャーチ・オブ・ブレズレンという新しいグループを産み出す結果となりました。このことは、ジョンおよびチャールズ・ウェスレイによって指導されたイギリスにおける大きな伝道的覚醒をもたらす重大な要因となりました。これは、メソジストが発生する上で、敬虔主義が大きな役割を果たしたことを意味しています。

キリスト教の歴史を通じて、特に十六世紀以降、信者たちの献身を深めるために情熱が再び燃え立たされる時が幾度も訪れました。これには、新しい回心者を得ようとする熱心な努力が伴っていました。このような特別な時期は、「リバイバル」という適切な名で呼ばれました。そのような努力の主な目標は、改革というよりは、刷新にあったのですが、その影響力は、教会の性格に重要な変化をもたらしました。上述したイギリスでの伝道的覚醒は、その良い例です。1740年代のアメリカにおける「偉大な覚醒」も、あるいは1800年頃アメリカの辺境で起きた、いわゆる「ケンタッキーリバイバル」も、その一例と言えるでしょう。この運動は、個人的回心の必要性に焦点を当てるといふ、キリスト者の内的経験に迫る特別な方法を

新たに取りました。「生まれ変わる」ことや「救われる」ことによって内的確信を受け入れることは、十字架上での、キリストの死を通して可能となった贖いを受け入れることによって与えられるものでした。この方法は「リバイバル主義」と呼ばれるようになりました。大規模な集会がその主な方法でした。時として、そのような集会は、長期に渡りました。人々は、仮の宿舎を建て、数日宿泊しながら野外の広場で集会を持ちました。それらはキャンプ集会と呼ばれました。リバイバル主義の概念と、その方法は、アメリカや世界各地におけるキリスト教の発展に、大きな影響を及ぼしました。

神の教会の先駆者として、特に意義のある他の二つの運動を述べておく必要があります。その一つは、ケンタッキーリバイバルの夜明けの頃に、アメリカの辺境で発達しました。1800年代の初期の頃、その地方のキリスト者の指導者たち、特に、トマス、アレクサンダー・キャンベル、バートン・W・ストーンは、キリスト教に分派と教派が増加しているのを気遣っていました。彼らは、これは、キリストの意図に反する教会の状況であると思っていました。このようなキリスト者の一致を追求する努力は、教派を作る傾向に逆らうことはできませんでしたが、神は唯一の教会を有しておられ、全てのキリストの真のしもべは、その教会の会員であるという新約聖書の教えに対する注目すべき証しでした。

十九世紀におけるもう一つの運動は、1867年に組織されたナショナル・ホーリネス・アソシエーションです。大勢の指導者たちは、教会がますます世俗的になり、行動の規準がゆるんできていることを心配していました。彼らは、聖い生活に関する聖書の教えに焦点を当て、キリスト者の完全という規準に到達する手段として聖化の教理を掲げました。このことは聖霊の業によって可能となりました。ジョン・ウェスレイのことばに従って、聖化とは、「完全な愛」を経験することであり、義認の後に起こる「恩寵の第二の業」であると見なされました。

新しい改革

これらの背景—すなわち、ほとんど十九世紀にわたるキリスト教の歴史と改革、刷新の努力—の中で、神の教会改革運動とすでに起こった宗教改革運動とは類似していました。例えば、信仰による義認、聖書の権威、救いによる「生まれかわり」の経験とそれに続く聖霊の働きによる聖化、毎日の生活における聖め、等に関する力強い説教がなされました。さらに、これらの教えが、神の唯一の聖なる教会との関係において、どんな意味を持っているかが、非常に強調されました。このように、以前の改革でなされたような、一、二の点だけを強調するのではなく、神の教会運動は、全ての聖書の真理と、全ての真のキリスト者を、信仰と、交わりにおいて一致するように導びこうと努めました。このことによって教会は、教会に対する神の御旨を十分に知ろうとしました。このような全抱括的観点からするなら、これまでの改革運動は、この新しい改革運動のような広い幻と大きな希望を持っていませんでした。神の教会の改革者たちは、「教会を見ました」。彼らは、全ての忠実なキリスト者たちを、目に見える、統一された交わりへと導くことを、心に描いておりました。その交わりは、全ての分派を越え、全ての教派の壁を乗り越えるものでした。

第三章 信仰の基礎としての聖書全巻

聖書の引照箇所

詩篇 51篇、58篇、78篇 1～7、117篇

ヨハネの福音書 14章 21

テモテへの手紙第二 3章 14～17

信条のどこが間違っているのか

神の教会の初期の指導者たちは「われわれは、聖書以外の書かれた信条を持たない。神のことばが、われわれの唯一の信仰の規範である。」と宣言して、非常に強い肯定的陳述をしました。このような言明は同時に、キリスト教史上に現われた、個人的、あるいはグループによって表明された、いわゆる信条と呼ばれている、多くの短かい信仰の陳述に対して、否定的立場を取ったこととなります。この中には、使徒信条、ニケア信条、アウグスブルク信仰告白（ルーテル派）、ウエストミンスター信仰告白（改革派、長老派）、39ヶ条（聖公会）などの多くの歴史的信条も含まれていたと思われまます。そこで当然発せられる問は、「キリスト教信仰の要点を、厳密に述べたこれらの歴史的信条のどこが間違っていると彼らは考えたのだろうか。」ということです。いずれにしても、これらのほとんどの信条は、キリスト教の責任ある団体によって承認され、公式に採用されてきたのです。

初期の教会の指導者たちが、これらの信条に反対したのは、これらの信条の特定の内容に賛成しかねたからではありませんでした。実際、その解釈に柔軟性を持たせれば、歴史的な「我は…を信ず。」という陳述のほとんどは、彼らの信仰のあかしの一部分とすることができるものでした。

彼らが反対したのは、人が作った信条を、キリスト教の真理を表わす、完全な表現として使用するという考え方に対してでした。神の教会運動の初期の著作を調べてみますと、彼らがなぜ、種々の信条に反対したのかが明白になります。それは次のような理由によるのです。

1. 信条は、「人が作った」ものです。それらは聖書の中に示されている真理を述べており、聖書的なことばを使ってはいても、聖書自体ではないのです。それは、人間によって解釈されたものです—すなわち人が選択し、人が手を加え、人が表現したものです。美しい辞句で飾られているとしても、「靈感された神のことば」ではありません。

2. 信条は不十分であり、キリスト教信仰の部分的陳述にすぎません。信条は聖書の真理の一部分を正しく陳述したり、説明したりしてはいますが、聖書全体を述べているものではありません。聖書全体のみが、神の真理の総てを抱括するものです。抽出された真理や、部分的真理は、不十分なものであり、かつ、危険でもあります。省略は、歪曲につながります。抽出は、「このいのちのことばを、ことごとく」（使徒5章20）ということの上、人間の判断を置くものです。

3. 信条は分割的です。ほとんど全ての信条は、ある特定の人、団体、分派、教派が自分たちの信仰による特定な解釈を述べるために形成したものです。それらは元来、その特定の団体と、他の総てのものとの間に、一線を画することを、意図したものです。信条は、信仰のある側面に関しては、真理と、誤謬とを区別するのに役立つかも知れませんが、信条の本当の効果は、キリスト者を一致させるというよりはむしろ、お互いに隔絶させて来ました。

4. 実用的な意味においても、信条は、キリスト教信仰の真の意義を減ずる傾向を招きます。簡単にまとめられ、時には美しいことばで飾られた、型にはめられた信仰の陳述は、典礼の一部として、公的礼拝においてしばしば用いられているので、その語句は、あまりにも親しいものになり過ぎて、その意味を良く考えずに、いたずらに反復されています。すばらしい信条も、単なる形式と化してしまう傾向があります。神の教会の初期の指導者たちは、この「冷たい、死んだ、形式主義」に反対したのでした。

5. 信条の告白は、「新生」という救いの経験に取って代れる傾向があります。多くのグループでは、キリスト者になるためには、口で信仰告白をすることのみが要求されます。このことは、人は、イエス・キリストによるゆるしを得るといふ、真に人生が変わるといふ経験をしなくても、信条を口で告白しさえすれば、キリスト者として認められる、ということの意味をしています。以上は有効な反対意見ですが、それらは100年前と変わらず、今日でも同じです。神のことばの全てのみが、私たちの信仰の根拠ある表明となり得るのです。

では、私たちは、何を信じているのか

聖書全巻を信仰の基盤とするという原則を確認しても、自己の信仰を簡単に説明する用意をしておくという問題は解決されていないことに、私たちはただちに気付きます。実際、問題は、さらに複雑になります。「聖書全巻」というのは大きな一冊の本です。—すなわち実際には、66巻の多様な書物が集大成されているものです。したがって、その教えを簡単に要約する容易な方法はありません。それは、主題別に組織的に配列されている訳でもありません。その多くは、明確に述べられているというより、歴史的な文書であり、その中に教えが暗示されているものです。さらに、聖書は、今日とは、文化的に非常に異なっている状況の下で、何世紀も以前に書かれたものですから、現代の時代と状況に当てはめるのは、必ずしも容易ではありません。それでは、私たちが信じているものを、どのようにして、正確に知り得るのでしょうか。どのような方法で、私たちは、他の人々に、聖書の真理を、叙述したり、説明したりして、分かち合ったり教えたりできるのでしょうか。

聖書を翻訳するのは歴大な仕事です。原語を知っているだけでは不十分です。実際に起こったことを理解するには、古代の歴史を十分に知らなければなりません。またそこに書いてある意味を完全に理解するためには、文化的状況に関する十分な知識が必要です。聖書解釈は専門の学者や、神学者に任せるべきだと、思える程です。専門家に聖書の内容を整理してもらい、一頁にまとめられた要約を与えてもらってどうしていけないのでしょうか。もちろん、これが一番簡単な方法ですが、でも満足できるものではないでしょう。なぜなら、私たちは、初期の神の教会の指導者たちが反対した「人が作った信条」と同じ立場に戻ることになるからです。彼らの解決法も、私たちの解決法も、「古き良き聖書に帰れ」といふことなのです。

聖書研究とその解決のための原則

聖書学者や神学者から学ぶ点が多くある一方、聖書全巻を、私たちの信仰の基盤とするなら、私たち個々人が、直接、みことばの研究者となる責任を負わなければなりません。もし、私たち自身が、聖書のヘブル語、ギリシャ語を学び、自分たちのための和訳ができれば、大変良いのですが、これは、実行できないことで

あるかもしれません。したがって、聖書学者に大いに頼るということになります。聖書の翻訳以外にも、個人の聖書研究に必要な基本原則があります。それは、聖書の教えを理解したり、その教えを実生活に応用したり、他の人々とそのことを分かち合うように私たちを導いてくれるのに役立つものです。その原則とは次のものです。

1. 私たちが必要としている唯一の信条は聖書のみである、という強い信念を持って始めなければなりません。私たちは、聖書が、私たちの「信仰の規範」であるという事実を受け入れます。なぜなら聖書は、神の民に与えられた、靈感された神のことばであるからです。これが、神の教会の初期の指導者たちの出発点 1981年、アメリカでの神の教会総会は、次の内容の決議を採択しました。「本総会は、聖書が、靈感された、無謬の神のことばであることを信ずる。聖書は、『すべて、神の靈感によるもので、教えと戒めを矯正と義の訓練とのために有益です』（Ⅱテモテ3章16）。したがって、聖書はキリスト教信仰を理解し、キリスト者としての生活を営む上で、誤りのない指導書として、全く信頼し得るものであり、権威のあるものであることを宣言する。」
2. 私たちは、また、聖書全巻が、聖霊の導きの下で、解釈されるべきものであることを認めなければなりません。イエスが特別に聖霊を「真理の御霊」（ヨハネ14章17）と呼ばれたことを心に銘記しておくことは大切です。それゆえ私たちは、聖書を祈りをもって学び、その意味を、私たちに明らかにしてくださるように、聖霊の導きを求めなければなりません。このような学びの姿勢は、主観的、個人的解釈から、私たちを守ってくれるのに役立ちます。
3. 各々の聖書の箇所は、その状況の文脈の中で、学ばれるべきものです。聖書の各々の聖句、または物語りの特定な時代や状況を考慮に入れることによってのみ、真の意味が理解できます。例えば、詩篇51篇は、バテシバと姦淫を犯し、その夫ウリヤを策略によって殺したダビデが、預言者ナタンによって、その罪を指摘された後に書いたものであることを知って初めて、正しい理解ができるのです。この知識があつてこそ、赦しを乞うダビデの苦悩の叫びは、非常に意義あるものとなるのです。このように、文脈を考慮に入れて研究することは、聖書のあらゆる部分において言えることです。
4. 聖書の教えは、ある特別な箇所を選び出して一定の見解を支持したり、特定な点を証明しようとすることによってよりは、むしろ聖書全体の光の中で、理解されるべきものです。例えば、聖書のある部分は神の怒りと審きのみを語っていますし、他の部分は、神の愛と憐れみのみを語っています。審きと、愛という神の真の本質を理解するためには、その両方の部分を用いなければならないのです。すなわち、聖書全体の視野が必要なのです。
5. 聖書に用いられている種々の文学形式を区別できるようにする必要があります。聖書の多くの部分は、率直で、単純に書かれています。すなわち、物語り、戒め、約束、教えなどです。他の部分は、比喩的言葉で書かれ、象徴や、比喩を用いて、その意味するところを伝えようとしています。歴史書は、そのほとんどが、出来事を文字通り伝えていきます。しかし、例えば、ダニエル書や、ヨハネの黙示録のような書物は、解釈をしなければその意味がわからない象徴がたくさん用いられています。イエスは、その両方を用いられました。例えば、ヨハネの福音書3章16は神の贖罪の計画を文字通り率直に述べているものですが、マタイの福音書6章25の、「からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけま

せん。」は、比喩的表現であって、着物を着ないで行きなさい、ということではないのです。

6. 永遠に変わらない事柄と、時代に即応して考えなければならない事柄とを区別できなければなりません。例えば、「地の四隅」（イザヤ書2章12、黙示録7章1）という表現は、当時の一般的世界観を反映しているものであって、世界は四角であるとか、聖書には誤った宇宙観が記してあるということの証拠として採用されるべきものではありません。
7. 健全な聖書学に意図的に注目することは大切なことです。このことは、熱心に聖書歴史を研究すること、注意深く本文の語句を研究すること（できれば、原語で）、また、最高の聖書学者たちの研究成果を知ることがを意味しています。しかし、注意しなければならないことは、「学者」といっても偏見があって、特定の見解を支持するために、証拠を抽出して、聖書全体の視野を無視することを、しばしば行なうということです。このような点において、学者自体を評価する必要があります。標準的注解書と、聖書の種々の翻訳は、私たちが神のことばの責任ある解釈者となるために役立つでしょう。
8. 神の教会は、公式の信条を持ちませんが、キリスト教信仰の主要点を確認することは、大切なことです。これらの点は、私たちが作り出したものではありません。それらは、神のことばの中で、何度も繰り返えされている「真理」です。それらは基本的には、神、私たち、および宇宙についての、私たちの理解を述べています。それらは、過去、現在、将来と関連しています。これら全ての理解が、聖書に基づいていなければなりませんし、その意味することが、私たちの日常生活に適応されなければなりません。聖書解釈のためのこれらの基本的原則を用いて、私たちが持っている唯一の信条である聖書全巻に基づいた私たちの神学を形成するように準備しましょう。

第4章 他のキリスト者達と共有する基本的信仰

聖書の引照箇所

- ローマ人への手紙 10章 8～11
- ピリピ人への手紙 2章 5～11
- ローマ人への手紙 3章 21～24、5章 1～2
- ガラテヤ人への手紙 2章 15～16
- ペテロの手紙第一 2章 4～5、9
- ヨハネの黙示録 1章 5～6
- エペソ人への手紙 4章 1
- コリント人への手紙第一 10章 31～33

異なっているが、よく似ている

神の教会運動がこれまで特に強調して来、これからも強調して行く聖書の「特色ある」教理に注目する時、すでに学びのために選び出された8つの教理が、神の教会にのみ固有のものではないことを、明確に理解しておかなければなりません。

それらの背後に、そしてそれらと共に、すでに述べた通り聖書全体の真理が存在するのです。神の教会運動が起こる前の1800年間にわたるキリスト教の歴史において、これらの真理の大部分は、注意深く研究されてきました。それらは様々な異なる意見の交換がいろいろとなされることによって、改訂され、聖霊の導きの下

に「正統的」あるいは、正しい健全な教理の陳述として、熱心なキリストの弟子たちによって受け入れられました。従って、既に適切に述べられた基本的教えを、再改訂することや、疑問を差し挟んだりする必要はありませんでした。例えば、父・子・聖霊の三位一体の神、キリストの神性、聖書の靈感を信じること等の基本的教理は、完全に受け入れられ、疑う余地なく、宣べ伝えられました。

この様に、神の教会運動は、奇異で、波長の異なった一派だとは考えられるべきではありません。その教えには、非正統的で、異端的なものは、何一つありません。神の教会運動はこのような基本的キリスト教教理に関する限り、完全に歴史的キリスト教の主流の中に属しています。この運動を分析した、最近の学者達は、初期の指導者達が、一つとして、「新しい」教理を導入していなかったことに注目しています。初期の指導者たちが強調し、宣教した全ての神学的教えは、正統的キリスト教の枠内で、既に、明言されていたものでした。史的信仰の主要なもののうち、一つとして、省かれたり、異質なものが付加されたりしたものはありませんでした。この運動の初期の指導者たちは、改革者ではありましたが、キリスト教信仰の基本的教義を曲げたり、改ざんしたりは、しませんでした。彼らが「父祖たちの信仰」を受け継いで維持したいいくつかの点に注目してみることは、重要だと思われれます。

1. 他のほとんどのキリスト者と共有する基本的教理

キリスト教は多くの分派や、多くの教派、運動等に分かれており、多種多様な教えがあるにもかかわらず、キリスト者であると自認する総ての人々、及びグループによって、受け入れられている信仰の中核ともいべきものがあります。勿論、そこで当然問題になるのはこの共有している信仰が、どのようなものであるかを、どのようにして正確に知るのか、ということです。幸いなことに、教会史の初期に作られた、キリスト教信仰の基本的内容を要約して述べたものがあります。その内のいくつかは、キリスト教界において、広く使用されています。それらの中で、最も広く受け入れられているのは、ニケア信条です。それは、ローマカトリック教会、ギリシャ正教、殆んどとは言えないまでも、多数のプロテスタント教会で、認められ、用いられています。この信条を見てもみますと、キリスト者の殆んどが信じている基本的信仰の内容が分かります。

この信条の性質を理解し、その作成の目的を理解するためには、その背景を知る必要があります。この信条は、ニケア信条と呼ばれていますが、それは紀元325年に、西北アジアのニケアという町で会議が開催され、信条が起草され、承認されたからです。これは、キリスト者の指導者達が集った、最初の世界的会議でした。この会議は、ローマ皇帝コンスタンチヌスによって召集され、当時、ローマ帝国内で問題となり不穏な状況となっていた神学論争を静めるためのものでした。その問題点は、キリストの神性でした。すなわち、キリストは、神—すなわち神の子—であるのか、それとも卓越した人間—すなわち神の預言者—であるのか、という問題でした。後者は、エジプトのアレキサンドリア教会の長老であるアリウスを指導者とする一派によって支持されていました。それに対して、アレキサンドリア教会の司教と、アタナシウスという名の強力な指導者が反対していました。烈しい論争の結果、この会議では、アリウスの見解を退ぞけ、イエスは、神であり、父なる神と同質で、聖霊と同等であるという宣言を採択しました。その信条は、一般に受け入れられているキリスト教信仰の他の項目の要約も含んでいました。紀元381年、コンスタンチノーブル会議において、ニケア信条の拡大されたものが、再度採択

されました。さらに後世、細かい変更が加えられ、現在ニケア信条と呼ばれるものになり、広範に用いられるようになりました。この古代の信条を調べてみると、殆んど総てのキリスト者が信じている基本的教えを、良く要約していることがわかります。ギリシヤ語の原文から訳してみると、次のようになります。

我らは、唯一の神を信ず。
全能にして、
天地の創り主、
見えるもの、見えざるものの
全ての父。
我らは、唯一の主、イエス・キリストを信ず。
彼は唯一の神の子、
父より永遠に生まれ、
神よりの神
光よりの光
真の神よりの真の神
造られたものでなく、生まれ、
父と一つの存在であり、
彼によって、全てのものが造られ、
我らのため、また我らの救いのため天より下り、
聖霊の力により受肉し、
おとめマリヤより生まれ、
人となり、
我らのため、ポンテオ・ピラトの下で、
十字架につけられ、
死んで、葬むられ、
三日目に、聖書の示すとおりに甦がえられ、
天に昇られ、
父なる神の右に座し、
栄光の内に再臨し、
生ける者と、死せる者とを審く方である。
その御国には終りが無い。
我らは、聖霊を信ず。
聖霊は、主であり、生命を与える方であり、
父より出で、父と子と共に存在し、礼拝され、
栄光を帰せられ、
預言者を通して語りたもう。
我らは、唯一の普遍的、使徒的教会を信ず。
我らは、罪の赦しのための唯一のバプテスマを信ず。
我らは、死者の復活と、
来たるべき世での生活を待ち望む。

アーメン。

以上の陳述も細かく読んでいくと、キリスト者の信仰の基本的原則が明確に、しかも手短かに述べられていることが、わかります。神の教会を含む、多くのキリスト者達は、例えば、「罪の赦しのための唯一のバプテスマ」等のいくつかの語句

を、もっと詳しく、あるいは明確に述べたいと思うでしょう。しかし、この信条は、殆んどのキリスト者が同意している使徒的信仰の本質を述べている基本的なものです。特に、イエス・キリストが、神なる主であられることに、特別な強調点が置かれており、ローマ人への手紙10章8～11、ピリピ人への手紙2章5～11、における高度なキリスト論と関連があることに注目してください。

2. 主なプロテスタントのグループと共通な信仰

十六世紀、西ヨーロッパの教会は、プロテスタントの宗教改革と称されている大きな変動を経験しました。マルチン・ルター、ウルリッヒ・ツヴィングリ、ジャン・カルヴァン、その他の改革者達が中世のローマ・カトリック教会によって生み出された教えや習慣のあるものを否定しました。これらの改革の中からキリスト教史の中で新しい流れとなるプロテスタントが起こって来ました。プロテストとは「あることを擁護して証言する」という意味です。しかし、カトリック教会に反対した人々が総て、お互いに一致していた訳ではなかったため、いろいろな種類のプロテスタントが、自己の教会組織や、信仰の告白を制定しました。多くのグループが起こって来ましたが、歴史家は、普通、それらを4つの主なグループに分けています。そのうちの3つの派、すなわち、ルーテル派、改革派、聖公会は、一般的にプロテスタントの主流派と称されています。

神の教会運動は、直接には、これらのいずれの一派にもその源流を見出すことはできません。しかも、新約聖書のキリスト教こそが正しいものであると信じていますので、プロテスタントと呼ばれることにさえ抵抗して来ました。しかし、明らかにプロテスタントが強調している多くの点は、確かに聖書的ですから、神の教会の立場と合致するものです。従って、プロテスタントとして知られているキリスト者の大部分の人々と、共通の信仰を持つことが重要となってきます。そこで、主流グループとの類似性に、先ず注目してみましょう。

A 信仰義認。 この聖書的真理を宣言することは、十六世紀宗教改革の基本原則となりました。ローマ人への手紙3章21～24（「イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それは、すべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」）とか、ローマ人への手紙5章1～2（「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主、イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」）等の聖句によって明白に示されていることに基づいて、改革者達は、良い行ないによって救いを得るという考え方をまったく否定しました。このことは、巡礼、聖遺物崇拝、免罪符を買うこと等によって功績を積むという考えを放棄することを意味しました。これらの聖句を読んで、マルチン・ルターは、義認は、信仰によるのみであると強く強調しました。善行は（秘跡をも含めて）ほめられるべきことであり、また、キリスト者の生活から生み出されるものですが、決して救われるための方法ではありません。義認は、神からの贈物であり、イエス・キリストの贖罪のわざに対する信仰によって受けることができるのです。

B 万民祭司。 中世には、一般のキリスト者は、直接神に近づくことは許されず、司祭や聖人のような、教会によって権威を認められた人々の仲介を通さなければならぬと教えられていました。宗教改革者たちは、この考えを否定しました。それは、ペテロの手紙第一、2章5、9（「あなたがたも・・・霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として・・・主である祭司・・・とされた民です。」）、また、黙示録1章5～6（「また、私たちを王とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。」）という聖句によって、宗教改革者

たちは、あらゆる信者は神に近づく特権を与えられていることを確証しました。だれでも神に直接祈ることができ、神から直接に答えをいただくことができます。新約聖書のことばによるなら、すべての信者は、祭司とされたのです。

C 霊的権威としての聖書の十分性。ローマ・カトリック教会では、教会での総ての権威は、聖職者に帰され、その最高の権威は、一般にローマ教皇と呼ばれている、ローマ司教の上に置かれているという教義を、長い間にわたって発展させてきました。この主張は教会会議によって支持されるようになりローマ教会では一般的に受け入れられるようになりました。改革者たちは、この考えを全く否定して、教会における全ての権威の基礎は、聖書であると断言しました。この教皇権に対するプロテスタントの挑戦は、聖書を信仰と生活の唯一の基準とするのに効果がありました。このようにして、みことばの宣教と、聖書の学びが、再び、教会生活の中心となりました。

D 全てのキリスト者に対する「神の召し」。中世のカトリック教会は、司祭たちや修道会に入っている人々（修道士や修道女）のように、ごく限られた一部の人々だけが、神から召されているのだと教えていました。他の仕事に従事している人々は、世俗的であり、霊的意義を持っていないものだと見なされていました。宗教改革者たちは、エペソ人への手紙4章1（「召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」）や、コリント人への手紙第一、10章31（「あなたが・・・何をするにも、ただ神の栄光をあらわすためにしなさい。」）の聖句に基づいて、全てのキリスト者は、毎日の日常生活の中で、従事しているどのような尊ぶべき仕事を通して、キリストをあかしする者として神に召されていることを明確にしました。このように、キリスト者の信仰は日常のあたりまえのこととなり、特別に規定された宗数的儀式や、習慣に限定されないようになりました。これらは、少なくとも、神の教会運動が、プロテスタントの主要なグループと共有している4つの聖書的信仰です。

3. 「急進的」プロテスタントと共通な信仰

十六世紀には、主要な宗教改革者たちはローマ・カトリックの信仰や習慣を充分に否定しなかった、と考える多くの誠実な人々がいました。多くの「急進的」グループ、例えば、スイス兄弟団、フッター派等が、中央ヨーロッパ、西ヨーロッパに起こりました。そのほとんどは、一般に、再洗礼派と呼ばれていました。1540年代に、これまで独自に活動していたこれらのグループのいくつかは、オランダの神学者、メノー・シモンズの指導下に統一され、メノナイトと呼ばれるようになりました。後世になって、クエイカー派、敬虔主義者、ピューリタンの一部、その他のグループが、急進的プロテスタントの群れに加えられました。これらのグループの信仰の主要な点を調べてみると、神の教会が保持しているのと共通な聖書の真理の非常に重要ないくつかの点が明らかにされます。

A. 信者のバプテスマ。主要な宗教改革者たちとは異なり、これらの急進グループは、幼児洗礼を否定しました。彼らは、「信じてバプテスマを受くる者は救はるべし。」（マルコ伝16章16節）というキリストのみことばに従って主張しました。信仰は、バプテスマに先行すべきであり、幼児は、それができていないとして、全ての大人は、幼児洗礼を受けていても、その信仰を告白し、再び洗礼を受けるべきであると主張しました。このような訳で、彼らはアナバプテスト（再洗礼派）と呼ばれました。これを神への冒瀆であると考えたカトリックやプロテスタントの教会は、彼らを迫害しました。

B. 新約の教会の復興。急進派の人たちは、新約聖書には、あらゆる時代にわたって教会の本来あるべき姿の模範が示されていると信じていました。とりわけ、教会は、この世から聖別された人々から成る聖なる共同体であるべきであると教えました。純粹な教会を確保するために、彼らは、個人的行動に対して、厳しい規則を設け、マタイによる福音書第18章15～17において示されているように、教会による戒規を執行することによって、規則を強化しました。

4. 他の「ホーリネス」グループと共通な信仰

いろいろな共通点を持っている多くの異なったキリスト者のグループが、新約聖書の聖めの教理を特別に強調する点において、お互いに神学的に、近い関係にあり、聖めに関する、聖書の教えに対して同様な解釈をしています。

このように、神の教会運動は、聖書的真理を追求していた初期の多くの指導者たちに、多くを負っていますし、また、他のいろいろなキリスト者たちと多くの事柄を共有していることが明らかになります。この共通性を認めるとき、私たちはこれまで多くの、忠実で、熱心で、真面目な学者たち、教会の指導者たち、そして宗教改革者たちに賛辞を呈さなければなりません。しかしそれと同時に、神の教会運動が、特別に、重点を置いてきた聖書の教えが、多くあることも認めなければなりません。これらの点を、5章から22章までにおいて取り上げ、細かく述べることにします。

第5章 救い

聖書の引照箇所

詩篇 51篇 5

マタイ福音書 1章 21、9章 16～17、20章 28

ローマ人への手紙 3章 23、7章 19、10章 9～19

コリント人への手紙第二 5章 12

エペソ人への手紙 1章 7、3章 14～19

テサロニケ人への手紙第一 5章 23

十字架でのキリストの死を通して全人類に救いが与えられるという教理は、キリスト教の福音の中心主題です。既述のニケア信条が、「我らのため、また我らの救いのため天より下り」と述べているとおりです。しかし、救いの計画は、キリスト教だけに特有のものではありません。世界のキリスト教のほとんどが、その信者に、何らかの「救い」を提供しています。従って、何が普遍的な人間の問題であると考えられているかを理解し、その問題解決のためのさまざまな方法の基本的内容調べることが重要です。

なぜ救いが必要とされているか

人種、部族、皮膚の色、国籍、性別、生活状態を問わず、全ての人々は、問題をかかえています。それぞれの人、またそれぞれのグループが自分の生活を苦しめている特別な問題に対する解決を求めています。そしていろいろな宗教の人々に受け入れられています。なぜなら、それらの宗教は、人々が求めている解決を与えてくれると思われる、何らかの方法を示しているからです、東洋の宗教のほとんど（ヒンズー教、仏教、道教、ジャイナ教、その他）において、問題を解決する方法は、苦悩と、悪との根源に対する、その宗教の考え方と、密接に関連しています。

ほとんどの宗教においては、宇宙に存在する超自然的力によって、苦悩が引き起こされると考えています。その超自然的力は、善いものも、悪いものも、しばしば神格化されたり、霊または、悪霊と考えられています。したがって、このような力を喜ばせたり、その悪い影響力に抵抗するために考え出された定められた行為、または儀式をすることによって、苦悩からの救いが与えられます。また、ある宗教では、苦悩は、宇宙の運行に無知であるために、引き起こされるものだと考えています。従って、その宗教の創始者によって発見されたり、その創始者や預言者に啓示された宇宙の運行を理解する秘密のカギを用いることによって、救いは見出せるとしています。さらに他の宗教では、苦悩は、人間の欲望が原因となっていると考えています。救いは、自己否定や、禁欲主義や、快樂をもたらす全てのことを避けることによる欲望の克服によって、与えられるとしています。ある宗教は、苦悩は回避できないものであると考えています。それゆえ彼らは、ある特殊な習慣に従うことにより、将来または死後、その苦痛が少しは和らぐという希望を与えているにすぎません。

キリスト教は、人間の苦しみに深い配慮を示していますが、その原因は、容易に答えられるようなものではありません。ある苦悩は無知や、不注意に原因があり、また他のものは、説明不可能なものだと考えられています。しかし、苦悩それ自体は、人間の本質的問題だとは考えられていません。ユダヤ教とキリスト教の思想では、全人類の基本的問題は、罪であり、それも苦しみの一つの原因なのです。「ああ、私はとがある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。」（詩篇51章5）と書いて、そのことを全人類に対して、証しをしています。使徒パウロは「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」（ローマ3章23）と言って、この普遍的問題を再確認しています。このように、罪は、人類の本質に根差しているものです。神は、男と女とを、「ご自身のかたちに」（創世記1章27）創造されました。そのことは、善と悪とを選択する自由をも含んでいました。この創造の物語りは、いかに、最初の二人の人間が、神の戒めに対する不服従を選択するようになったかを述べ、この出来事以来、その例にならう傾向が、人間にあることを語っています。

聖書には、罪は二通りに描かれています。第一は、困難で正しい選択より、容易で誤った選択をしがちであるという傾向です。それは、「的はずれ」とか「届かない」ということばで表現されています。ローマ人への手紙7章14～24に記されている使徒パウロ自身の問題に対する証言は、罪の定義の良い例です。「罪」ということばの第二の用法では、罪は、神に対する反逆、または、神の律法に対する違反行為として、定義されています。使徒ヨハネは、この意味での罪を、「不法」（Iヨハネ3章4）ということばで表わしています。この違犯は、邪悪な行為の形（悪いことを行なうか、良いことを行なわないかのどちらか）をとる場合もあり、また、偏見、憎しみ、情欲、ねたみ、などの悪い態度や感情の形をとる場合もあります。これらの罪深い行為や感情のいずれも、肉体的苦痛をもたらすこともあります。罪や、犯罪の概念が明瞭に定義されていない文化の中でも、「恥をかく」とか「面目を失う」という表現で、同じ状態にあることを認めています。これらは、その文化の倫理的規範の期待に答えた生き方ができなかつたり、それに従えなかつたりした場合に起こることです。名称はどのようなであっても、罪は人が負っていかなければならないものとしては、非常に大きな重荷です。キリスト教の観点からすれば、罪は、究極的には、死と、神からの永遠の隔離へと導いていきます。この罪を克服し、その結果から逃れる何らかの方法を、人類は渴望しているのです。

「救われるために、何をなすべきか」

パウロとシラスはキリストを宣べ伝えたために、ピリピで捕えられて投獄されましたが、地震により奇跡的に救い出されました。そのピリピの獄吏が熱心に質問したのが、「救われるためには、何をしなければなりませんか。」という問いでした。

(使徒16章30)。これは、全人類の深い関心事を言い表わしたものと言えます。

「キリストの福音」は、この問に対するすばらしい、十分な答えとして、神が用意してくださった喜びの知らせに他なりません。マタイの福音書1章21に、「その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」とありますが、これは、この世におけるイエスの使命を告げ知らせるものでした。このみことばは、罪の力を征服し、神の民を罪に打ち勝ついのちへと引き上げるといふ神の目的を宣言するものです。イエスをこの世に遣わして、全ての人を救うといふ神の御計画は、旧約聖書の多くの預言によって、確認されており、新約聖書全体の中に示されています。救い、すなわち、罪とその結果からの解放は、今やあらゆる人のために備えられています。

全てのキリスト者は、神がイエスを賜物として与えて下さったことにより救いの約束が成就したことを喜んでいますが、この賜物を受ける過程に関して、全ての人が同じ考えを持っている訳ではありません。パウロとシラスによってピリピの獄吏に与えられた答えは、次のような比較的簡単な形式になっています。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」(使徒16章31)。

「主イエスを信じなさい」ということばの意味には、様々の解釈の余地が残っています。それらは一般的に次の三種類に分けられています。

1. 告白的見解。この見解を唱道する人々は、「信じる」、「告白する」ということばを主に強調しますが、これらのことばは救いの方法に関連のあるいくつかの聖句に用いられています(使徒16章31の他にも、使徒8章37、ローマ10章9、Iヨハネ4章15参照)。キリストの救いのみわざを人々が誠実に信じて、それを告白するとき、救いは現実になるのだと、人々は主張しました。こうして、個々のグループによって認められた信仰箇条が非常に重要になります。なぜなら彼らは、人が救いを受けるために告白し受け入れるべき信仰告白のことばを制定するからです。

2. 礼典的見解。多くのキリスト者のグループは、救いをキリストの御名によるバプテスマの礼典の執行と結びつけています。彼らは、新約聖書の多くの箇所、バプテスマが救いの出来事と結び付けられている事実を、上げています。たとえば、上述したピリピでの出来事では、「そのあとですぐ彼と、その家の者全部がバプテスマを受けた」(使徒16章33)と述べられています。この出来事以前にも、ペンテコステの折のペテロの説教において、次のような勧めがなされています。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によって。バプテスマを受けなさい」(使徒2章38)。使徒パウロは、自分の救いについて、エルサレムで証言している時アナニヤから次のように告げられたと言っています。「立ちなさい。その御名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい」(使徒22章16)。このような聖句や他の聖句から、あるグループでは、キリスト教のバプテスマは、それ自体、救いをもたらすものであると考えています。したがって、この見解をとる人々は、バプテスマによって子供たちの救いを確かなものとするために、子供が誕生するとすぐにバプテスマを授けるべきだと主張しています。

3. 経験的見解。多くの他のキリスト者たちは、イエス・キリストの教えや、新約聖書の多くの箇所で見られる、救いとの関係において、「新生」の経験が強調されていることを主に注目しています。その主たるものは、ニコデモの疑問に対する主イエスの返答です。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。…あなたがたは、新しく生まれなければならない・・・」（ヨハネ3章3・7）。イエスが「新しいぶどう酒」（マタイ9章17）や、「新しい衣」（ルカ5章36）の比喻を用いられたことによって、新しいというイメージがさらに強調されています。パウロも変化を経験することを強調しています。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」（Ⅱコリント5章17）。この聖句は、明らかに、救いの個人的経験の側面、すなわち、決意、悔改め、主のもとに立ち返ること、回心、赦し、確信を鋭く浮き彫りにしています。「キリストを告白すること」と「バプテスマ」は、既に起こっている神の内的な再創造の働きを打ち消すものではなく、外へ向かって証しするものとなります。この見解を強調する人々は、一般に福音派と言われています。神の教会は、この分類には入りません。

「救われる」とはどういう意味か

イエス・キリストによって救いを経験するとき、実際に起こることを描写するために、新約聖書ではいくつかのことばが用いられています。「新しく生まれる」（新生）と「回心」（方向転換をする）は、そのうちの二つです。しかし、おそらく最も一般的に用いられていることばは、「義認」です（ローマ3章24、4章25、5章9参照）。このことばは、神学的には、「神に受け入れられるようにされる」という意味ですが、キリスト教信仰の意味をほとんど全て包含しています。このことばは、神が人類に罪の問題を解決する方法を提供してくださったというメッセージを、伝えています。この方法は、苦難と敗北、または悪行を善行で埋め合わせようとする方法ではなく、赦しの方法です。すなわち、過去の記録を帳消しにして、新しく始めるという方法です。このような抱括的な赦しは、偶然とか、安易に訪れるものではありません。罪は恐ろしく、その大きさは、全世界に及んでいます。義認は、神の大きな愛と、神が進んでその愛を劇的に、しかも高い代価を払って示すという方法以外には、実現し得なかったのです。すなわち、神はご自身のひとり子をこの世に送り、ひとりの人として生まれさせ、生涯を送らせ、不当な死を遂げさせ、復活によって死に打ち勝ち、父なる神のもとに帰らせられたのです。この歴史的出来事の意義は、次の二つのことばによって要約できます。「受肉」（神が肉体をとること）と「贖罪atonement」（満足のいく弁償、あるいは罪の償い）です。したがって、救いは父なる神の愛と、御子なる神の働きが結合して、全ての悔改めた罪人が、赦しと義認を得られるようにしたのです。

同様の意味を持つ別のことばは「贖いredemption」です。これは「救出する、あるいは買い戻す」という意味です。エペソ人への手紙の記者は、次のように述べています。「私たちは、この御子のうちにあって、この御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と、思慮深さをもって…」（エペソ1章7、8）。さらに、聖書で救いを表わすのに、よく用いられる別のことばは、「和解」であり、「調和を得させる」という意味です。パウロは「新しい創造」をもたらす救いについて述べたすぐ後で、その意図を拡大して次のように述べています。

「これらのことはすべて、神から出ているのです。神はキリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神は、キリストにあつて、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです」（Ⅱコリント5章18、19）。義認は、このように、罪深い人類を神との和解へと導きます。

上記のことがらに、特別な強調点を置くことは、大変重要なことです。すなわち、この義認は、全世界の全ての人々が自由に得られるものなのです。だれでも自分の罪を悔い改め、その罪を捨てるなら、救われます。そこで必要とされているただ一つのは、信仰です。すなわち、イエスの犠牲の死は、実際に、罪の赦しと、罪責からの救いをもたらすものであるという事実を、信じて受け入れることです。そうすれば、無代価で与えられている神の賜物を受けること、すなわち、キリストを救い主として受け入れることの準備ができています。このことが起こった時、その人は自分に変化が起こったことを知ることができます。これは、確認し得る出来事です。救いの「経験」を語ることは全く正しいことです。その人は「新しく造られた者」です。その人は、罪責と恥との重荷から解放されて、聖めにあずかる候補者となるのです。

さらに別の面がある

以上に述べた救いに関する経験の基本的側面は、世界中のほとんどの福音的キリスト教のグループが唱道しているところです。しかし、さらにもう一つの救いの側面がありますが、それを特別に強調する人はそれほど多くはありません。これは、「聖め」と呼ばれており、主として「聖め」派教会と一般的呼ばれている一群のキリスト者たちによって、特別に注目されているものです。これらのグループは一般的に言って、十八世紀イギリスで起こった福音的覚醒の偉大な指導者であるジョン・ウェスレイによって説かれた聖めに関する聖書的洞察に、従っていると言い得るでしょう。その後一世紀たって、イギリス、アメリカ両国において、このウェスレイの教えに対する関心が再び起り、その結果「ホーリネス運動」と呼ばれるものが出現しました。神の教会において、初期の指導者となった改革者たちはこの教えを信奉し、それを聖書の真理であると確信したので、自分達の教えとして取り入れました。聖めは、神の教会の歴史を通して、大いに強調された点の一つとなっています。

聖めは、救いの過程の継続、あるいは救いの過程の第二段階であり、「全き救い」へ導びく「恩寵の第二の働き」と理解されています。これは、義認が部分的あるいは、不十分な再創造だというわけではありません。義認は、過去の罪に対する完全な赦しと、神との全き和解を私たちにもたらすものです。しかし、赦しの喜びの真只中にあつてさえも、人はやはりまだ人間的であることに気付いているのです。すなわち、過去の罪深い行いを繰り返す傾向が残っていることに気付いているのです。したがって、人が義と認められるには、キリストによる神の超自然のみわざ以外には不可能であると同様に、超自然的助けなくして、継続的に罪を克服することも不可能であることを知っておくのは、重要なことです。新約聖書は、この種の助けが得られることを明確に教えています。「聖め」（聖める）とは、このような過程を表現するのに用いられることばです。

使徒パウロは、この聖めの問題と、その方法とを明らかにする点で役に立ちます。テサロニケの信者に対する手紙の中で、彼はある種の罪を避けるよう熱心に勧め、その達成方法に関する良い知らせを告げています。「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。・・・神が私たちを召されたのは、汚れを行なわせる

ためではなく、聖潔を得させるためです」(Iテサロニケ4章3、7)。この手紙の終りに、パウロは、罪に打ち勝つための可能な助けについて、さらに書いています。

「平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをしてください」(Iテサロニケ5章23、24)。したがって、聖めとは、「責められるところのない」状態にあることであり、また、「聖い目的のために別けられている」状態にあることです。聖めに関する新約聖書の箇所的大部分は、聖めが状態であるか、完了した出来事であるか、継続している経験であるかの、いずれかを意味するものとして述べています。

聖めの教理を強調する人々の間では、この恵みのわざは、聖霊によって、行なわれるか、与えられるものであるという共通の理解があります。これには十分な理由があります。聖書のいくつかの箇所はこのことを特に確証しています。例えば、パウロは異邦人に言及して、「聖霊によって聖なるものとされた」者(ローマ15章16)と言っています。ペテロの手紙第二、1章2は、「御霊の聖め」という語句を使っています。パウロはテサロニケ人への手紙第二、2章13において、「神は、御霊による聖めと、真理による信仰によって、あなたがたを、初めから、救いにお選びになったからです。」と述べています。さらに重要なことは、私たちといつまでも共におらせるために、「真理の御霊」という「もうひとりの助け主、あるいは「慰め主」を送ってくださるというイエスの約束です。「父がわたしの名によってお遣わしになる」方は「聖霊」であるとイエスは語られました(ヨハネ14章16、17、26)。確かに、聖霊は、助け主、聖め主としての役にぴったりです。さらに、ペンテコステのときの驚くべき経験や聖霊が「くださった」その他のときの経験は、彼らの限界を克服し、上からの力を受ける結果をもたらしました。このようなことは、聖めは聖霊の働きによって成し遂げられるものであるという見解を、強力に裏付けています。

しかし、聖霊の他の箇所は、聖め主を聖霊だけに限定していないことも、無視することはできません。イエスの祈りの中で彼は、父なる神に弟子たちを聖めていただくように懇願して「真理によって彼らを聖め別ってください」と祈っています(ヨハネ17章17)。上述のテサロニケ人への手紙におけるパウロの祝祷は、「神ご自身」を聖め主として述べています。別の所では、パウロは、「キリスト・イエスにあって聖なるものとされた方々」(Iコリント1章2)と言っています。同様にパウロは、ダマスコ途上で聞いたキリストの声について、イエスは彼に「わたしを信じる信仰によって、・・・聖なるものとされた人々」と言ったと述べています。(使徒26章18)。さらに、聖書の他の箇所では、信じる者が、自己自身の聖化に貢献できることを示唆しています。テモテへの手紙の中で、パウロは、「ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです」と述べています(IIテモテ2章21)。

これらのさまざまな表現は、特別に問題とはなりません。新約聖書の記者たちは、まだ三位一体という概念を厳密には発展させていませんでした。したがって、神の各位格については、何ら区別をしていませんでした。これら全ての箇所は、聖めは信者の心の中における神のみわざであり、信者に誘惑に打ち勝つ力を与え、神の御旨や道に故意に違反する人生を送ることがないようにさせるという点で、一致しています。

第6章 聖さ

マタイの福音書 5章 2～11、48、16章 24

ローマ人への手紙 6章 12、22、12章 2

コリント人への手紙第一 1章 2

ガラテヤ人への手紙 5章 22～24

コロサイ人への手紙 1章 28

テトスへの手紙 2章 11～14

キリストにおける完全

神の教会では、まず最初に、新約聖書における聖い生活に対する勧めを認め、それを真剣に、文字通りに受け取っています。例えば、不完全なコリント教会の人々でさえ、「聖徒として召され、キリスト・イエスにあって聖なるものとされた方々へ（Iコリント1章2）と、使徒パウロによって、言及されています。コロサイ人への手紙の中で、パウロはすべての人は「キリストにある完全な人」と呼んでいます（コロサイ1章28、英訳）。ヤコブは、「何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」（ヤコブ1章4）と言っています。ヘブル人への手紙の記者は勧告のみならず警告を発し、次のように述べています。「すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主をみることはできません」（ヘブル12章14）。新約聖書には、聖さ、聖化、聖徒としてふさわしく生きること、新しいいのち、義、敬虔さをすすめている、もっと多く個所があります。これらすべての中で最高のものは、もちろん山上の説教の中の「だから、あなたがたは、天の父が完全のように、完全でありなさい」（マタイ5章48）というイエスの命令です。このような広範で、明確な聖書の教えは、無視できませんし、また、軽く見過ごすべきでもありません。

明らかに、ただちに起る質問は、有限な人間が、そのような規準に達する生活をするのが現実的に可能なのかということです。大部分の言語において「完全」ということばは、相対的意味ではなく、絶対的な意味をもっています。完全ということには程度の差はありません。どんなにうぬぼれの強い人でも、完全な者はだれもいないということを経験的に認めるでしょう。それでは、どのようにして、キリスト者は、そのような規準に達し得ると考えたり、完全な生活をするのができるかとあえて主張することができるのでしょうか。この問題を取扱うためには、二つの基本的問に対する答えをまず見出さねばなりません。第一は、新約聖書に用いられている「完全」ということばの真の意味は何であるかということであり、第二は、人が真に聖い生活することは、どのようにして可能となるか、ということです。

まず、第一の問にこたえる際、ヘブル語とギリシャ語の原語で書かれている場合を除いて、現代の聖書はすべて、翻訳だということを、念頭に置いていることが大切です。翻訳をする学者たちは、原文の意味を最も良く伝える現代語の語句を探しています。新約聖書のごく最近のいくつかの翻訳では、前述した個所で、「完全」という語を用いていた場合も、今では「成熟」とか「成人」という語で訳しています。例えば、コリント人への手紙第一、2章6に、「しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります」とあり、エペソ人への手紙 4章12～13には、「完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです」とあります。コロサイ人への手紙1章28では「それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです」となり、コロサイ人への手紙4章12では「あなたがたが成人した人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう」（改訂標準訳）、ヘブル人への手紙6章1では「私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありませんか」となっています。

明らかに、ある学者たちは、「完全」よりも「成熟」とか「成人」ということばの方が原語の意味をより適切に伝えると思っているようです。

これは、本質的には同じことを意味する二つの語のどちらかを選ぶという問題ではないのに注目すべきです。「成熟」と「完全」とは真の同義語ではありません。「完全」とは、欠点のないことを指し、「成熟」とは、十分に成長したことを指しています。これは、責任ある成人であり、自己が創造された目的を遂行する用意ができた状態を意味しています。既に引用されたパウロのことばを借りるなら、「神のすべてのみこころを十分に確信」することを意味しています。エペソ人への手紙の中の「完全に大人になって」という句は、著者の定義によれば、「キリストの満ち満ちた身のたけに達する」という意味です。用語が変わっても、規準が下ったり、ゴールが変わったりしたということではありません。ただ解り易くしたというだけです。

歴史的に概観すると、キリスト者の完全を熱烈に唱道した人々でさえ、この語句を、靈的成熟と同じだとしています。完全とは、人間的誤りや間違が皆無であることだと考えた人は、ひとりもありませんでした。ホーリネス運動の父と見なされているジョン・ウェスレイは、「その意図において完全である」ということばを用いました。さらに進んで、罪を、神の律法を意図的に犯すことであると定義し、ウェスレイは、罪のない、全ての行為の意図において「完全」な生活について語りました。この意図における純粋さを達成することを「完全な愛」と呼びました。

ダニエル・S・ウォーナーは、十九世紀のホーリネス運動の有名な指導者であり、神の教会の初期の指導者の中では傑出した人物でしたが、聖書的聖さを最も強く唱道した人のひとりでした。彼は、1880年に次のように記しています。「贖われた魂に対して完全という語を用いるとき、それは人間が墮落の影響から道徳的に完全に回復されることを意味している。肉体的、精神的回復ではない。それらは、復活の日まで起こらない。……。従ってキリスト者の完全とは、その質におけるものであり、程度の問題ではない、換言すると、私たちの道徳的性質の完全さであり、私たちの力が完全に成長することではない。このように、完全であることは、罪から自由になる状態である」（『聖書は、第二の恵みの働きを証しする』28ページ）。ウォーナーは、さらに続けて、だれも、その程度において完全であると主張することはできないと言っており、キリスト者の成長の頂点に達したとは言えないとしている。「しかし何千もの人々が、心が完全に清められたという聖霊の証しを受けた」と述べている。新約聖書の記者たちが、キリストにある完全さを語る時、彼らは靈的成熟、完全な愛、心の純粋さ、いかなる意図的悪行に対しても勝利を得ていることを意味していたということが、明らかになります。

聖さはどのようにすれば可能になるか

基本的問の第二は、「人が実際に聖い生活をするためには、どのようにしたらよいのか」ということですが、それは容易に答えられます。すでに述べた聖い生活に対する定義によってもわかるように、「道徳的意味での完全は、人間的には不可能である」とはつきりと言うことが、できます。長い間、多くの人々が試みましたが（ある人々は、非常に熱心に努力しましたが）、総ての人々は、使徒パウロがローマ人への手紙の7章で述べているのと同様の経験で終わってしまいました。パウロは、彼の内的葛藤を生き生きとしたことばで回想しています。「私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです」（18）。さらに苦闘を語った後に、

失望して叫んでいます。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょか」(24)。パウロは、正しい人になるように必死になって求め、熱心に努力しましたが、自分が正しい人になることはできませんでした。

マルチン・ルターは、十六世紀の偉大な宗教改革者ですが、彼の経験は、義に至ろうとする人間の努力の空しさをさらに明らかに示しています。彼は長年、罪を犯そうとする自分の性質を克服し、心に平安を見出そうと激しい戦いを続けて来ました。修道院に入り、この世から遠ざかろうとしました。修道僧として、アウグスチヌス派の規則よりもさらに厳しい生活をし、定められたよりも長い間祈祷と断食をしました。長時間敬虔な瞑想に耽りしました。ローマにも出かけ、教皇に拝謁しました。これらのことはいずれも、彼が熱心に求めていた神との平和が与えられたという確信をもたらすにはいたりませんでした。大いに努力したにもかかわらず、使徒パウロと同様に、彼は依然としてみじめな人間でした。

しかし、神はこれらの人々や私たちを助けることなしに、このような挫折した状態に放置したりはなさいませんでした。神は、「心の聖いもの」は幸いであると約束されました(マタイ5章8)。神は、このみじめさからのがれる道を備えられました。パウロは、その方法を見出したと証ししています。ローマ人への手紙7章25でパウロは次のように喜んでいます。「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します」。マルチン・ルターも同様に、行いによるのではなく、信仰による救いという偉大な真理を発見することによって、彼が求めていた内的確信を得ました。しかし、この罪の力からの解放ということは、ほんの始まりであり、神はその勝利を継続する方法をも備えてくださいました。イエスは次のように約束をしておられます。「父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。……その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです」(ヨハネ14章16～17。傍点著者)。これ以上の頼りになる助け主を想像することはできません。その方は、私たちとともに住んでくださるだけでなく、私たちの内におられるのです。

「助け主」としての聖霊を自分の心の中に受け入れることは、神の教会、および、他のホーリネスの群れで強調され、聖化の経験を示すひとつの方法です。日々聖い生活をする事実を、使徒パウロは特に、次のように述べています。

「しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです(ローマ6章22)。聖霊の導きのもとで生活することは、罪深い欲望や誘惑に打ち勝つ勝利の生活をすることを意味しています。そのような聖い生活が、キリストのすべての弟子に期待されていることを、パウロは明らかにしています。「というのは、すべての人を救う神の恵みが現われ、私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。キリストが私たちのためにご自身をささげられたのは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心なご自分の民を、ごじぶんのためにきよめるためでした」(テトス2章11～14)。

聖い生活態度

聖めの教理は、単なる抽象的な神学的概念ではありません。毎日の日常生活の規範となるものです。聖めは、行動や、態度や、自分が期待することにおいて表わ

さるべきものです。パウロは、ローマのキリスト者たちに次のように勧告しました。「この世と調子を合わせてはいけません。・・・心の一新によって自分を変えなさい」（ローマ12章2）。この「世」と妥協しないということは、一般的文化の特定の側面と関連があります。それは、私たちの社会で一般に行なわれている習慣を棄てたり、それに反対したりすることも含んでいます。あるいは、個人的名声や、快適さを放棄することであるかも知れません。あるいは少し変っているとか、少し変な人だと思われることであるかも知れません。神の教会運動の初期の頃、多くの「この世的」習慣は避けられるべきであるとされました。「聖められた人たちは、自分の肉体に害になる可能性のある食物を食べないように気をつけましたし、慎しみのない、派手で、贅沢な衣服を着ることに反対し、虚栄と見栄のためにのみ身に着ける装飾品や、品位のない、時間の浪費に過ぎない娯楽や、神に栄光を帰さない社会的行事にも参加することに反対しました。この運動の歴史のある時期においては、このような、してよいことと、してはならないことが非常に重要視されました。聖められたと主張する人々は、実際に聖い生活を送っていることが、この世に対するひとつの証しであると考えられていました。最近では、このような特定の規則に関しては、あまり語られず、日常の行動のもととなる心の内的状態が、もっと強調されています。強調点をどこに置くにしても、聖めは行為から離れては存在しないということを、忘れてはなりません。心が聖いか否かを示す本当の証拠は、生活態度にあるのです。

しかし聖さは、この世的なものを避けることだけではありません。ガラテヤ人への手紙5章22～23で言及されている御霊のすべての実が、自分の行為や、人間関係の中で、大きく姿を現わさなければなりません。聖められたことの証しとして、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」ほど効果のあるものではありません。この混乱している世において、すべての人々とこのような方法で交わることによって、私たちの聖さを表わすのです。

聖霊に満たされた生活

自分の生活の中に聖霊を受け入れることによって聖められるとは、あまりにも敬虔で信仰深いために、現世と殆んど関係がない「理想的な」聖人となる、ということではありません。そうではなく、日常生活において少なくとも四つの積極的な特徴をもって証しする人を意味しています。

勝利—聖霊に満たされた生活を最も良く表現しているものの一つは、ローマ人への手紙6章であり、新約聖書の偉大な勝利の章とも言うべきものです。「もはやこれからは罪の奴隷ではなくなる」とか、「罪に対しては死に、神に対しては…生きた者」とか、「死者の中から生かされた」とか、「いのちにあって新しい歩みをする」という語句のすべてが、もはや苦しみながら自我と戦う必要のないことを意味しています。「全き愛は恐れを締め出します」（Iヨハネ4章18）。私たちは、イエスにあって勝利を得ています。イエスによって私たちは「圧倒的な勝利者」となっているのです（ローマ8章37）。

成長—自我に打ち勝つことにより私たちは自由になり、主イエス・キリストの恵みと知識の内で成長するのです。ヘブル人への手紙の記者は、読者に、「成熟を目ざして進もう」（6章1）と勧めています。パウロはコリント人に対して、「私たちはあなたがたが完全な者になることを祈っています。」と書き送っています（IIコリント13章9）。地上の人生においては、この探究が終着点に到達することはありません、私たちはパウロのように、聖霊の導きの下でキリスト・イエスにおい

て上に召してくださることを求めて、「目標を目指して」体を伸ばして一心に走っているのです（ピリピ3章14）。

証しするカーイエスの地上における最後のことは、彼の弟子たちが、聖霊に満たされる時、力を得て、地のはてまで、救いのみわざを証しするようになるという約束でした。キリストにあって「完全にされた」人は、このことに関して、黙っていることはできません。そのような人は、「行って、人々を弟子とする」ことに励むようになります。

奉仕のための手段—聖霊を受けるときの特典のひとつは、「賜物」を受けるということです。すなわち、キリストの名において、効果的に奉仕するために必要な「手段」が与えられるのです。賜物は、私たちが、自分の体を使って神に栄光を帰するために与えられます。それによって、人々の必要に答え、墮落した人々を助け、一杯の水を与え、私たちの祝福を分かち、御霊の実を必要としている人々に分け与えるのです。

第7章 神によって制定された共同体

聖書の引照箇所

マタイの福音書 28章 16～18、18章 19～20、28章 18～20

ヨハネの福音書 10章 7～9

使徒の働き 1章 7～8、2章 46～47、20章 28

コリント人への手紙第一 1章 2、12章 18～20

エペソ人への手紙 1章 22～23、4章 22～25

テモテへの手紙第一 3章 5

情報と問題点

神の教会運動の中で最も強調されてきた聖書の教えを選び出すことができるならば、それは、教会の教理でしょう。これには十分な理由があります。初期の神の教会運動の指導者たちに、改革の必要性を気づかせたのは、その当時、教会が分裂し、この世のことに心を奪われていたからでした。彼らは、問題の重要性を理解し、たとえ外的に大きな変革が行なわれたとしても問題は解決され得ないことを知っていました。聖書に立ち返り、教会に対するキリストの願いと意図の真の性質を再発見する必要があったのです。彼らは学んで行くうちに、教会の教理が中心であり、キリスト教の他のすべての教理は、教会と関連しており、その焦点は教会であることに気がつきました。贖われた人々が集められ、個人的にも、また、キリスト者としての集団としても機能していくのは、この教会においてなのです。キリスト教の奉仕と宣教が実行されていくのも、主としてこの教会を通してなのです。この教会とは、最後の審判の時に、主が喜んで、永遠のいのちへと迎え入れてくださる、「キリストの花嫁」である教会に他ならないのです。

初期の頃のこの改革運動の指導者たちは、よく、教会を「見る」ことについて語りました。これは、単に教会についての教理を理解する以上のことを意味していました。それは地上における贖われたすべての民によって形成される力ある神の民の群れのために、神が計画しておられる偉大な計画の「幻」を見ることを意味していました。彼らは、教会とはすべての人間的障壁—人種、皮膚の色、国籍、階層、家柄、性別、教育程度、性格、文化—を越えた交わりとして理解していました。彼らは教会を、「完全な絆」によって結び合わされたものであり、全人類に対する神

の愛を証しする最も強力なものであると見ていました。その愛は、神の民の心の中に「広まり」、愛の奉仕によって外面に表わされたのです。このような考え方は、単なる深遠な概念ではなく、すばらしい、また可能性のある現実なのです。指導者たちは、このことを信じ、宣べ伝え、詩を作り作曲して、歌いました。

改革運動の主な目的は、キリストが元来意図された教会を宣べ伝え、現実化することにあつたのですから、このすばらしい聖書の教えが改革運動の、中心的な教えとならないはずがあるでしょうか。教会についての教理は、神の教会と、あかしにおいて重要な事柄ですから、本章と次章を用いて、この壮大な幻の内容を探求したいと思います。

神の民のための神の御計画

教会は、第一義的には、交わりであるとしても、また、一種の組織であると言うこともできます。なぜなら、教会はひとつの確立された団体だからです。しかし、教会はこの世のいかなる組織とも異っています。すべての他の組織は一政府、学校、企業、病院、奉仕団体、労働組合、同業者団体、クラブ、他のいかなる組織をもった団体も一人によって創設され運営されています。大部分の組織は、有意義な目的を持ち、社会において価値のある機能を果たしてします。しかし、教会以外のすべての組織は、人によって考え出され、人間による存在理由が与えられています。しかし、教会はこれと異っています。教会は、神が定められた組織です。もちろん、その構成員は、人間です。しかし、その起源、その名称、その組織、その目的は、神によるものです。神は、あらゆる点において、直接に介入しておられます。新約聖書は、神が御自身の民の所属を明らかにし、彼らがいっしょに働き得るような組織がなければならないと考えておられたことを非常に明確に示しています。この神の御計画の重要な側面は、次に挙げる点を含んでいます。

1. 教会は神聖です。なぜなら、それはイエス・キリストによって、創立され、彼がこの世において依然として生きておられることを示すものとして機能するからです。時の初めから、神は、その「民」を定めておられました。長い間、神の民は、ヤコブの子孫、すなわち、「イスラエルの子供たち」と呼ばれていました。しかし、キリストが来られると、「選ばれたものたち」は、全人類に及び、イエスの死と復活によって可能になった救いを受け入れる人はだれでも、「新しいイスラエル」の民—キリストの教会の一員—とされました。このことのゆえに、キリスト、が教会の「設立者」であると言えるのであり、この世にあってはげしい反対、すなわち、「ハデスの門」（マタイ16章18）による反対に対してさえ打ち勝つてあかしを続けることができると約束しておられるのです。

キリストと教会との主要な関係は、使徒パウロによっても、繰り返し、確認されています。エペソの長老たちに対する別れのあいさつの中で、「聖霊は、神が御自分の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになつたのです」（使徒の働き20章28）と教えています。パウロは、多くの書簡の中で、教会を表わすために、「キリストのからだ」という語を用いています。この比喻は、教会が持っている多くの性質を明瞭に描くのに役立っています。またそれは、キリストと教会の一体性とをより適切に理解するのにも役立ちます。このイメージから引き出せるおそらく最も大切な意味は、よみがえられた救い主が現実に引続き示されているのが教会であるということでしょう。イエスが御自身に関して、父なる神に関して、聖霊の継続的あかしに関して、御自身に従って来る者たちの宣教に関して教えられたすべてのことは、教会によって現実となり、はっ

きりとした姿を示すのです。多くのキリスト教の神学者たちは、このパウロの思想をさらに進めて、「教会は、キリストの受肉の継続である」と述べています。

パウロはまた、からだという比喻を用いて、教会の中におけるキリストの位置を表わしています。彼はコロサイ人への手紙1章18に次のように書いています。

「また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです」。同様なことがエペソ人への手紙1章22～23にも述べられています。「また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです」。キリストがかしらなのですから、教会が神聖であるというのは疑いの余地もありません。

ヨハネの福音書10章1～9で、イエスは比喻を用いて、教会における彼の機能を描写しています。御自身を「良き羊飼」という表現で表わすと同時に、御自身に従って来る人々を「羊の囲い」中の群れと言っています。この比喩的な話しの中で、イエスは、御自身が教会の中で果たす役割を次のように述べています。「わたしは門です。だれでも、わたしを通してはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます」（ヨハネ10章9）。ユダヤ人の議会の前で話す際に、使徒ペテロは、キリストこそ、贖われた者の仲間に加わるための唯一の門戸であることを明確に述べています。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです」（使徒の働き4章12）。

このように、新約聖書の多くの箇所は、教会がキリストご自身によって建てられたものであるから、神聖な性格なものであることを明らかにしています。イエスは、引続き教会のかしらとしての機能を果たしておられ、だれでも、キリストを通してのみ、教会の一員として認められるのです。

2. 教会は神聖です。なぜなら、それが父なる神にちなんで名付けられているからです。名前は大切です。家族においては、名前はその人の基本的関係を示しています。組織においては、名前は一般的に関係と目的の両方を示しています。「神の教会」という名は、単に礼拝堂のドアに付けておく便利の良いラベルではありません。

「神の教会」と呼ばれているのは、それが神様の教会であるからです。コリント人への手紙第一、11章16とテサロニケ人への手紙第一、11章14では「神の諸教会」と複数形になっています。さらに、このことばは、コリント人への手紙第二、1章2、コリント人への手紙第二、1章1のように地区教会を指している場合があります。さらにもっと意義深いことは、キリスト御自身が、弟子たちのために、「あなたの御名の中に、彼らを保ってください」と祈っておられることです（ヨハネ17章11～12）。同様に、エペソ人への手紙3章14～15には、「家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります」という言及があります。これで明らかのように、「神の教会」とは、新約聖書における教会に対して付けられた名前です。他の名は必要ではありませんし、他の名前を使うことは、神の教会を分裂させる結果をもたらすだけです。

現代において、この名称を用いることは、問題がないとは言えません。まず、全く無関係の二百以上のグループがこの同じ名、もしくは類似した名称を用いています。このことは、どのグループを指しているのか区別するのを困難にしますし、時には

混乱や困惑を生じさせます。それから、ある人々が言っているように、この名称を用いるのは傲慢です。というのは、いかなる教会もグループも、この名前が意味している完全性に到達する生き方ができないからです。他の人々は、この名を用いるのは、あまりにも理想的で、幻想にすぎないと言います。このように問題があっても、神の民を指す名前に関する神の意図は明らかです。私たちは、神の名を帯び、それに栄光を帰さなければなりません。他のいかなる名も、これほど普遍的で、包括的で、すべての国民、民族にあてはまるものではありません。しかも、教会の神聖な性格をこれほどうまく表わしているものは他にありません。この名において、神は、御自身のみが受けるにふさわしい卓越性を受けておられます。他のいかなるものも、いかなる政治形態の組織も、いかなる教理も、いかなる国家による名前も、いかなるこの世的名称も、教会の名前としてふさわしいものはありません。私たちは、神の教会という名前を、誇りをもって、しかし傲慢にではなく、謙遜に自分たちの名前とすることができます。この名は、私たちをその名にふさわしい生活をするように向上させる力を持っています。

3. 教会は、聖霊に支配されているので、神聖です。新約聖書には、教会に関して多くの言及がありますが、この聖なる組織を、地上に形成することに関しては、ほとんど指示していません。いろいろな教会におけるいくつかの「役職」— 監督、長老、執事など— に対する言及はあります。しかし、これらの役職が、権威のある地位であるということはどこにも示されていません。むしろ、それらは、各々の教会における平等な信者である会員に与えられている地位と責任を示しています。例えば、ガラテヤ人への手紙3章28は、教会にいる種々の人々のことを記し、「あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです」と述べています。新約聖書には教会の組織に対する詳細な青写真はありますが、教会政治に対する原則は非常にはっきりと示されています。その原則とは、教会におけるすべての権威は、キリスト御自身から出、聖霊の絶えざる臨在と、働きを通して、機能するものであるということです。聖霊に導かれた、集合体としての機能を有するという原則は、コリント人への手紙第一、12章によく示されています。パウロは次のように記しています「さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です」（4～6）。「しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです」（18）。

神の教会の初期の指導者たちの説教においても最も明らかな主題の一つは、この原則を宣べ伝えることでした。彼らは、教会が、人間が考え出したあらゆる組織を形成することに強く反対しました。いかなる「人による規則」も、神の御計画を妨げるものであるという火のような確信を持っていました。彼らが本当に恐れていたものは、組織そのものではなく、聖霊により頼むことのない人間的に計画された組織でした。神によって支配されるという原則が実現するために、彼らは自分たち自身ではいかなる組織も作らないことを決めました。それぞれの決議や働きにおいて、彼らは、聖霊の導きを求め、その導きに応じて行動しました。神の教会運動は、ほぼ40年間、このような状態で、組織をまったく持たずに活動してきました。

しかし、運動が大きくなるにつれ、多くの努力がむだに費やされてきたことが明らかになりました。ある領域では、重複したことがあり、他の部分では欠けていることがあり、だれが、どの分野に責任があるのかが混乱していました。指導者たち

は、聖霊の導きという原則の中で、教会において協力できる任務を組織化していくことが可能であり、またその必要があることに気付きました。彼らは人間的組織を回避しようと求めるあまり、協力する有限の人間が、共通の理解による指針を持つことと、種々の責任を割当ててくることの必要性を忘れていたことを発見しました。もし、目標を達成しようとするならば、これらのことは必要でした。その結果、彼らは協力して計画を作り始めました。すなわち、これまでに獲得したものを維持する計画や、子供や、新しい改心者たちに、信仰の意義を教える計画や指導者たちを訓練する計画や、教会が全世界に証しをするための計画を作りました。彼らは、人間が神の教会を組織化することはできないという聖書の真理を喜んで受け入れたのと同様に、聖霊御自身が教会の構造を通して働かれ、目先の状況だけでなく長期的計画を作る上でも働かれることができることを発見して喜びました。教会は人間のものではなく、神のものであるという新約聖書の原則を覚えていることは重要なことです。私たちが用いるすべての組織、また人々は、聖霊の示しと導きに対して、すなおに従う器でなければなりません。

教会は、聖なる共同体です

1. 教会とは、神の恵みによって贖われた人々の目に見える共同体です。新約聖書の「教会」という語（ギリシャ語のエクレスシア）は、「呼び出された者たち」という意味です。この語は、世俗的な意味では、特別な目的のために集められた人々のいかなる集合体に対しても、用いられていました。イエスと、初代のキリスト者たちは、このことばに特別な意味を付与しました。彼らは、この話を、罪深い世から「呼び出され」、イエス・キリストおよび、お互い同士との交わりに入れられた人々を指す際に使用しました。このように、教会は、キリストを通して、救いを経験した人々によってのみ構成されているのです。救われることは教会の一員になることです。このことによってのみ、教会の一員とされるのです。

神の教会運動の先駆的指導者たちは、教会に加入するためのいろいろな制度は、多くの適切でない人々まで、この聖なる教会に所属することを許していることに気付きました。教会に加わるための資格や手続きに関して聖書を調べ、次のような簡単な言明を見出しました。「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった」（使徒の働き2章47）。この聖句は、いかなる人間も、教会に制限を設けたり、教会に加わるために種々の手続を設けることはできないということを明確にしました。神に代ってさし出がましく審判を行うという誤りを避けるために、この改革者たちは、新生を経験したすべての人はすでに教会の一員であると宣告しました。その他になにも入会の儀式は必要ではありませんでした。いかなる人も罪が赦されるそのときから、贖われた人々の交わりの中に加えられるのです。このように、教会は、神の救いのみわが自分の魂の中で起ったと、証しすることのできるすべての人々によって、それぞれの場所で構成される目に見える共同体なのです。

2. 教会は、礼拝し、教育し、配慮する共同体です。教会が最も良く、目に見える形で現わされるのは、その会員が、決まった時間に、礼拝と神をあがめるために、集まってくるときです。人々の声の一つとなって讃美の歌を歌うとき、神は栄光を受けられ、礼拝する者の心は高められます。個人または共同の祈りが天へ向かって献げられるとき、集会に出席している人々の信仰も高められます。神のみことばが宣べ伝えられるとき、福音の内容は、信者に新たな喜びをもたらす、罪人に希望を与えます。聖書が読まれ、講解されるとき、聞く者の心は光に照らされ、もっと大胆に、信仰をもって生活をするように励まされます。礼拝、主の晩餐と洗足式に参加

するとき、彼らは、神に感謝を表わし、全世界のすべてのキリスト者との交わりに入れられます。礼拝において、教会は人々が神を崇め、御子イエス・キリストという偉大な賜物を与えられたことに対する感謝をしようという思いに答えるための、共通の場を適切に、しかも劇的に提供しています。公開の礼拝は、神との交わりを最も崇高に表現しています。それは、共同体としての教会に参加することに伴う大きな特権です。ヘブル人への手紙の記者が「いっしょに集まることをやめたりしないで」（ヘブル10章25）と読者たちに熱心に勧めている理由が、ここから良く解ります。

教会のメンバーは同時に、「互いにそれぞれのもの」（エペソ4章25）です。教会は、お互いに分ち合い、配慮し合い、重荷を負い合う交わりです。その会員は、お互いに助け合い、励まし合い、徳を高め合います。教会は、キリスト者の配慮と愛の共同体です。

3. 教会は、神の宣教をする共同体です。教会は、この世に伝えるメッセージを持っています。教会の任務は、この世が必要としていることのために奉仕することです。そのメッセージとは、キリストにあって希望があるということです。すなわち、罪を赦され、罪過と恥から解放されるという希望、人生がどのようになろうともそれを乗り越える力を与えられるという希望、自由と正義が行なわれる社会に対する希望です。教会の任務は、和解のみことばを伝えると同時に、愛の奉仕のわざに励むことです。隣人を愛することは、神への愛と同様に大切なことです。地上の教会はまことに、「戦う教会」です。すなわち、神の民が、あらゆる悪に対して攻撃を加えているのです。何かを必要としている人々に、愛の奉仕をすることは、自分の光を輝やかせる（マタイ5章16）キリスト者の方法なのです。それは神が人々の間で、またこの世で働いておられることの明らかな証拠です。

教会の使命は、「伝道」ということばに、一番良く要約されています。このことは、福音の力を、示すことです。「あなたがたは行って、あらゆる国々の人々を弟子としなさい」。「私はあなたがたを送り出します」、「あなたがたは、私の証人です」という新約聖書の命令は、明瞭で、緊急を用いています。神の教会にとって、伝道は、選択できるものではなく、神の教会であることの必要な条件です。

第8章 教会統一された世界的共同体

聖書の引照箇所

詩篇 133篇 1

ヨハネの福音書 10章 16、17章 20～21

ローマ人への手紙 12章 4～5、16章 17～18

コリント人への手紙第一 1章 10～13、12章 13、25

ガラテヤ人への手紙 3章 26～29

エペソ人への手紙 4章 3～6、 13

コロサイ人への手紙 3章 12～14

ヘブル人への手紙 2章 11

ペテロの手紙第一 3章 8

情報と問題点

教会は力にあふれた組織です。教会は外部に対して力にあふれた組織です。なぜなら、邪悪な世の中にあって義のために力強い証しをなしているからです。また同時に、教会は、内部に対しても力にあふれた組織です。なぜならその本質的性格がそうだからです。前章で取扱った教会の二つの側面—その神的特質と、人間的構成要素—は教会の中に、二つの非常に強い力がお互いに緊張関係に置かれている事実を浮彫りにしています。その神的特性は、聖さ、一致、および神の無限の属性を現わしていますし、人間的特性は、不完全性、自己中心性および有限な人間のあらゆる限界を現わしています。これら二つの相違する力が教会という同一状況に置かれることは、すばらしい福音のメッセージを適切に描き出しています。そのメッセージとは、神が、私共人間をその限界を越えて、神の性質を帯びることができるようにしてくださったということです。個々の贖われた人にとって真実であることは、教会という「贖いの領域」全体にとっても真実であるのです。もしこの世における教会が真に「キリストのからだ」であるべきであるなら、組織的にも、神の性質を帯びるべきです。そして、これらの性質のうちで最も大切なものの一つは、一致です。—すなわち、普遍的に重要視され求められてきた性質です。しかし、これらの大変に強力な人間的要素のために、キリスト教の歴史を通じて、この目的を達成することは非常に困難でした。十一世紀までの統一された組織の中においても、常に派閥があり、異論を唱えるグループがありました。十六世紀以降は、教会の不一致はさらに一般的となり、対立や抗争というあり方を変えようとする興味もほとんどなくなりました。ごく最近まで、教会の統一を回復しようという新たな関心を呼び覚ます者の声は、「荒野で呼ばれる声」の観がありました。

聖書的基盤

教会がその一致を達成できなかった歴史とは対照的に、神が、その民の一致を意図しておられることを証しする聖句は実に多くあります。キリストご自身、この一致のために熱心に祈られました。初代教会の指導者たちは、熱心にキリスト者の一致を教え、その達成のために努力しました。神の民の間に神が意図された調和があることの美しさを、昔の詩篇の作者は次のように歌っています。「見よ。兄弟たちが一つになって共に住む (dwell in unity) ことは、なんとというしあわせ、なんとという楽しさであろう。それは頭の上にそそがれた、とうとい油のようだ。・・・それはまたシオンの山々におりるヘルモンの露にも似ている。」(詩篇133篇)。

新約聖書においては、まず第一に注目すべきことは、分派、抗争、不調和に対して多くの警告、がなされているということです。たとえば、ガラテヤ人への手紙5章19～21における「肉の行ない」のリストの中には、挙げられている事柄の半数以上が、人間関係が崩壊していることと関連があります。コリント人への手紙第一の中でパウロは、まず第一に分派の問題を取り上げています。「さて兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなたがたにお願いします。どうか、みな一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください」と彼に書いています(Iコリント1章10)。後になって、教会を、「キリストのからだ」になぞられて、次のように語っています。「しかし神は・・・からだをこのように調和させてくださったのです。それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです」(Iコリント12章24～25)。ローマ人への手紙の中で、パウロは強く勧めて次のように言っています。

「分裂とつまずきを引き起こす人たちを警戒してください、彼らから遠ざかりなさい。そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。」（ローマ16章17～18）。

これらの不一致に対する警告の他に、一致の基礎を擁護する明確な言明があります。靈感を受けた聖書記者たちが語っているのは、単なる人間的一致ではなく、キリストにある一致（unity in Christ）です。使徒パウロは、それを巧みに次のように記しています。「あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。・・・あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」（ガラテヤ3章26、28）。エペソ人への手紙の記者は、「霊の一致」について語り、つづいて、教会の一致一ひとつの中から一を神ご自身の三位格の一致と同一視しています。「からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召された時、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ・・・バプテスマは一つです。すべてのものの上であり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです」（エペソ4章4～6）。この思想は、イエスご自身が、受難の直前に示された深い願いに通じるものです。特に弟子たちのために祈られた後、イエスは次のように祈られました。「わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいたるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです」（ヨハネ17章20～21）。ヘブル人への手紙の記者は、この同じメッセージを再確認しています。すなわち、キリストと一致するという真理が、人を神の救いにあずかった他のすべての人々と一致させるものであるということです。「聖とする方も、聖とされる者たちも、元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としない」（ヘブル2章11）のです。

この一致の概念は多くのことを意味しています。先ず第一に、おそらく最も重要なものは、すべてのキリスト者が一致するということは、単なる目標ではなく、すべての人が認め、実行しなければならない事実なのです。キリストと一つであることは、キリストと一つである他のすべての人々と一つであるということに他なりません。パウロは、このことを非常に明確に語っています。「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです」（ローマ12章4～5）。このような関係は、それ自体において調和を持った生ける共同体を結果として生み出します。このことを可能にする基本的性質は愛です。使徒ペテロは調和と愛とを正しい関係で認めて、次の様に記しています。「最後に申します。あなたがたはみな、心を一つにし、同情し合い、兄弟愛を示し、あわれみ深く、謙遜でありなさい」（1ペテロ3章8）。パウロもキリスト者が深い同情心、慈愛、寛容、赦しのような徳を身につけるように述べ、さらに、「これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです」と言っています。さらに彼は、教会内での一致（unity within the Church）について語っていることを明確にするために、次のように付け加えています。「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです」（コロサイ3章15）。キリストにある一致のもう一つの重要な意義は、人々を互いに隔てている人間社会の障壁を乗り越えるのを可能にするということです。イエスご自身が、その弟子達の間一致をはかるため、社会的

障害を越えた教えをされました。キリストは「良い羊飼ひ」のたとえを用いて、神のご計画におけるご自身の役割を述べ、教会の領域をユダヤ教よりもはるかに拡大し、次のように語られました。「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らは私の声に聞き従ひ、一つの群に、ひとりの牧者になるのです」（ヨハネ10章16）。当時の排他的ユダヤ人は、自己の「選民意識」を誇りにしていましたので、神の贖いの愛は単に一つのグループにのみ限られるものでないという、このイエスのことばは、大胆な宣言でした。イエスが意図されたことは、主のことばに応答した者は、一つの群となるべきであるということでした。

パウロはさらに、キリストによって克服された社会的障害を広範囲にわたって指摘しています。彼はコリントの教会の人々へ送って、次のように述べています。「ですから、ちょうど、からだ一つでも、それに多くの部分があり、体の部分はたとえ多くあっても、その部分が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲むものとされたからです」（Iコリント12章12、13）。ガラテヤ人の手紙の中では、さらにすすんで、キリストにあって克服された障害の中に、性別の違いを含めて書いています。彼は勝ち誇ったように述べています。「あなたがたはみなキリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです」（ガラテヤ3章26～28）。

キリストにあって克服された、交わりや一致を妨げる文化的、社会的障害を列挙すれば数限りなくあります。人種的違い、国民性、階級、経済、皮膚の色、言語、政治形体、このようなものはすべて、キリストにあって、克服され神の子たちは全員、一つの体に結び合わされています。

神の教会の一致に対する確信

神の教会運動が教会に関する教理を強調していることはすでに前章で示したとおりです。その中でも最も強調している点は、教会の一致であるということは明らかです。この運動の歴史を調べますと、その発生の理由と、存在して来た理由の中心は、教会の分裂を招く教派組織に挑戦し、キリスト者の一致に関する聖書の教えを宣べ伝えることにあったということは明らかです。この運動の指導者たちはその初期から今日に至るまで分裂した教会が「バベルの塔的混乱」に陥っていることを慨嘆してきました。同時に神がお建てになった教会が、聖書の真理を唯一の信条とし、聖さを最も顕著な特徴とした、神の教会の一致を完全に回復するという幻を宣べ伝えてきました。この運動の指導者たちは、このグループの使命の最も大切な点は、教会が分裂した状態ではさばきに会うと警告すること、キリスト者の一致を聖書的水準まで引き上げること教会の存在によって、全世界のキリスト者の交わりが目に見える形で現実のものとなされ、その交わりの一員となる唯一の規準は、神に贖われた子であるというあかしであることを繰り返して語って来ました。

これらの宗教改革者たちにとって、教会の一致の重要性に関してこのような「光」を照らすということは、基本的な聖書の教理を再発見するということや、

単にユートピア的夢を実現させるということ以上のものでした。この運動は教会の分裂を単に嘆くということを超えてこの問題の解決への道を求めました。この解決は、基本的には、キリスト者をお互いに隔ててしまった、人間によって作られた堅固な教派主義を進んで放棄したことにあります。そして、新約聖書に見られる教会組織の最小限の規模に従うことにより教会の組織に関する事柄の方向づけを完全に聖霊の御手に委ねることが必要になりました。十九世紀後半にキリスト者の一致に関するこの明らかに単純な方法が提案された時その潜在的結果は、すぐに明白になりました。この考えは、まもなく、かなりの興奮をまき起こしこの運動の初期の指導者たちは一致した、聖い教会の幻を熱心に宜べ伝えました。

これらの「飛びまわるメッセンジャー」たちの熱意は多くの方法で表現されました。説教によって歌によって、また、何百もの印刷物によって「勝利の教会」が実現するのに新しい時代を待つ必要はなく、現在すでに実現しつつあると宜べ伝えました。遂に彼らは次のように声高らかに歌いました。

力強き改革が地に広まって行く。

神は、その強い御腕をもって、

その民を集める。(神の教会賛美歌 4 5 7 番 1 節)

また、

あらゆる分派によって、人は散らされたが、

あなたの子らは、家に帰ってくる。(同 4 5 7 番 2 節)

他の歌は次のように言っています。

分派と信条の時代は氷遠に去り、

この広い世界のすべての聖徒は兄弟である。

血で洗われたすべての者に交わりの手を伸べよう

愛はお互の心を結び合わせ、

それによって神の御旨は実現する。(神の教会賛美歌 4 5 3 番 3 節)

これらの悦びのことはよりもさらに偉大なものとして、一致した教会の性格に関する明瞭で確実な聖書の教えがあります。イエス・キリストは、唯だ一つの教会を建てられました。この教会は、キリストにあって、贖いを経験したすべての人々によって構成されています。その教会の信仰は神のみことばすべてに基づいており、聖霊によって支配されています。これらの基本的神学的概念は、歌にされ、会衆は歌うことに、これらの真理をあかししました。「われ贖われたりわれ光の中を歩まん」とか、「祝福された古き聖書に帰らん」とか、「この全き一致は何と美し」と歌いました。彼らは唯一の神の教会を見ており、それは自分達の手で打ち建てたり組織するものではないことを知っていました。一つとされた教会 (a united church) は、いかなる人間的な過程によっても形成されるものではありませんでした。真の一致は、神の賜物としてのみ与えられるものであり、神の愛の表現です。ダニエル・S・ウォーナーは次の様に語りました。「あゝ、兄弟たちよ、この完全な愛が、どれほど私たちすべてを、イエスにあって結び合わせてくれることでしょうか。一つの心、一つの魂、一つの精神になることによって、一致が天から与えられたものであることを私は証しするのです」(神の教会賛美歌 4 5 6 番)。

しかし、障害もある

キリスト者の一致の幻か高潔なものであるからといって、この目標へ到達するまでに現実的に困難があることを、忘れてはなりません。その障壁は大きく複雑です。

これら前述の教派間のいろいろな相違は、幾世紀にもわたって存在していました。比較的最近になるまで、キリスト者間の分裂は、主として教理的なものであり多くの個々の教派によって種々の見解が提出されて来ました。キリスト教の内部でのこのような対立状態は、現在でも存在しており、過去二世紀の間に次第に激しくなってきました。教派的特色は、しばしば強い忠誠心を養うので、グループ間の競争心が非常に緊張を増し、苦々しい思いさえ抱くようになります。十六世紀以来、教派的組織が一般的に受け入れられたことにより、優勢を占めている信仰あるいは習慣とは考えを異にする人々が、その特定のグループから離れ新しいグループを形成するようになりました。このような分派を作り易い状況によって、300以上の分派ができました。そのほとんどは、ヨーロッパやアメリカで起こり世界の各地へと輸出されていきました。最近、多くの合併がなされましたが、これらの分派が、今だにキリスト者の不一致の最も広範で、目につく状況なのです。

しかし、前述のものと殆んど変らないほど、あるいはそれよりも大きな障害がキリスト者の一致を妨げています。キリスト者をお互いに隔ててしまう非宗教的障害の中でも最も困る者は、人種や国籍の違いです。皮膚の色、人種的背景、国家への忠誠心に対する偏見は、すべての社会に、根深くしみこんでいます。これらを、克服するのは非常に困難です。キリストにあって、これらすべての相違が克服されたことはすでに述べてきましたが、人間的要素は、今だに存在しています。真の一致が達成されるべきであるならば、これらの人間社会の問題に、キリスト教の福音が意図的に、時には苦痛をも伴う形で、適用されることが必要です。教会が、世界のほとんどすべての地でまだ達成していない使命を残しているのは、この領域なのです。多くのキリスト者のグループが、人種、皮膚の色、国籍の違いによって依然としてお互いに隔てられたままでいます。

実際、キリスト者の不一致は、大変大きく複雑な問題です。容易で、自動的な解決はありません。

可能な夢

このような困難があるにもかかわらず、いかなる誠実なキリスト者も、キリストにあって一つとなること (oneness in Christ) は新約聖書全体において明白に、しかも肯定的に教えられていることを忘れてはなりません。キリストが弟子たちの一致をはっきりと意図しておられたことを無視したり、使徒たちが信仰の一致を保つように説いた書簡に見られる再三再四のすすめを無視したりすることはできません。神の教会運動の初期の指導者たちは、この一致のメッセージに特に心を動かされました。彼らは唯一の教会という幻を抱きました。彼らは一見不可能にも思える障害を乗り越えて、この一致のメッセージを述べ伝えることに励みました。一致した教会の青写真はまだ詳細には描かれていませんがキリスト者の一致に関する三つの主要な側面が、聖書的であり、実際的であるとして、心に描かれています。

1. 一致は基本的には霊における一致です。それは「キリストにある」すべての人々の共通した自己認識に基づくものです。
2. 一致は目に見えるものでなければなりません。キリストのからだの中に、競争心のある分派がなくなり、真のキリスト教の一致が目に見えるようにならなければなりません。個々の教会、それぞれの地域の教会、というように、すべてのレベルで一致が目に見える形にならなければなりません。
3. 一致は奉仕と証しへ人々を駆り立てる跳躍版です。キリスト者の一致は、それ自体で終るものではありません。イエスはこのことを明確に語っておられます。

「わたしは、彼らが一つとなるために祈ります・・・そのことによって、世が信じるためなのです」（ヨハネ17章20、21）。分裂は、キリストの贖いのわざに対する教会のあかしを妨げゆがめ、破壊します。神は、教会を導いて、究極的目標である世界的一致に到達させようとしておられるのです。

第九章 キリスト教の礼典

聖書の引用箇所

<一般>

マタイの福音書 28章 20

<バプテスマ>

マタイの福音書 3章 13～17、28章 19

マルコの福音書 16章 15～16

ヨハネの福音書 4章 1～2

使徒の働き 2章 38、41、3章 19、8章 12、39、22章 16

ローマ人への手紙 6章 1～4

カラテヤ人への手紙 2章 20

コロサイ人への手紙 2章 12

ペテロの手紙第一、3章 21

<聖餐式>

マタイの福音書 26章 26～28

マルコの福音書 14章 22～24

ルカの福音書 22章 19～20

使徒の働き 20章 27

コリント人への手紙第一 10章 16～17、11章 29、23～26

<洗足式>

ヨハネの福音書 13章 1～17（特に14～15）

テモテへの手紙第一 5章 9～10

儀式とそれを行なうことは、人間存在の重要な部分です。あらゆる文化には、最も単純なものから最も手の込んだものに至るまで、いろいろな特別の儀礼や儀式があります。人々は、特定の日や、季節や出来事や、人物や、習慣や、信仰など特定のグループの人々にとって、意義あるものを記念して、儀式を行ないます。あるグループは家族のように小さく、あるグループは部族または民族のように大きいかも知れません。さらに世界宗教のように、世界的規模の場合もあり信奉者が全世界にいます。このように多くのグループが儀式や、礼典や、象徴的行為を種々の目的のために用いています。すなわち、記念、強調、教育、保持、名誉をたたえること祝典を催すこと記憶すること、祈願、潔め、入門、終了等の目的のために行なっています。儀礼や儀式は宗教的習慣の中においては、特に重要でした。最も素朴なアニミズムから非常に高度な世界的宗教に至るまで、世界のすべての宗教は、すべてその目的を達成するための手段の一つとして、儀式を用いてきました。キリスト教も例外ではありません。教会は最初から、象徴や、儀式や、儀式的慣習を用いて信じる信仰を、理解し、広めるために重要な意味を伝えてきました。

キリスト教の礼典

一般的に、キリスト教は、ほとんどの他の宗教より儀式が少ないと言うことができます。それは、その第一の強調点が、神であるキリストを信じる信仰にあるのであって、何らかの儀式を行なうことによって、何かを達成しようということを意図しているのではないからです。イエス御自身によってなされたと言える三つの礼典があります。これらの礼典は、イエスの教えを受け入れる決心をした者も同様に行なうように勧められているものです。それは、バプテスマと主の晩餐と洗足式です。これらの礼典を繰り返し行なうことは、初代教会によってなされてきましたし、その後、あらゆる時代を通じて、種々の形式や程度の差こそあれ継続されてきました。

最初の二つの礼典すなわち、バプテスマと主の晩餐はほとんどすべてのキリスト者によって守られてきました。(クエーカー派など少数のグループは、すべての外面的儀式は単なる心の中の霊的経験の代用品にすぎないとして否定し、何も礼典を行ないません)。反対に、ごく少数のグループのみが第三の礼典である洗足式を行なっています。神の教会運動はその一つです。この三つの礼典の意味とその執行方法に関する理解はいろいろな相違があります。事実、主の晩餐に関してのキリスト者の間における不一致は、しばしば「われらの最も深い相違」と述べられ、キリスト者の一致にとって一番大きな教理的障害となっています。そこで、これらの礼典を守るための聖書的根拠をもう一度復習し、それらが象徴しているキリスト教の意味を理解することが、非常に重要になります。

これらの礼典の各々を討論する前に、キリスト者の様々なグループでは、これらの礼典を指すのに、二つの異なる言葉を用いていることに注目するのは価値のあることです。ある人々はそれを「秘蹟または聖なる礼典」(サクラメント)と呼び、他の人々は「定められた礼典」(オーディナンス)と呼んでいます。これらには、大きな意味の違いがあります。「聖なる礼典」ということばは聖なる行為を表わしています。それは、この聖なる行為を行なうことは、特定な霊的結果をもたらすという意味を含んでいます。従って、その行為自体が、救い、悪から守られることその他の、こうあってほしい思う霊的祝福に対して「有効である」と考えられています。このことは、例えば、バプテスマを受けること自体か、罪の赦しをもたらす、聖餐式で、パンとブドウ酒にあずかることは、キリストが実際にその人のからだといのちの中へ取り込まれることを意味すると考えられるのです。他方「定められた礼典」ということばは、神の勧告や命令を意味します。すなわち、キリストが、繰り返して行なうべきであると命じられた行為を意味しています。これらの礼典を行なうことは、主の命令に答えることであり、キリストに従順であることの証しなのです。この礼典自体は、何も結果をもたらしません。イエス・キリストの死と復活とによって、その人のいのちの中にすでに霊的働きがなされていることの公けのあかしとなります。

神の教会運動の指導者たちにとって、この両者のことばの相違は非常に重大であり、重要な神学的相違点をもたらすものでした。聖礼典または秘蹟という見方は、「わざ」すなわち、ある行為を行なうことによる救いの可能性を示唆していますが、定められた礼典という見方は、信仰による救いという考え方を保持し、わざは、それにとみなすものです。したがって、定められた礼典という解釈が新約聖書の教えであるとみなされました。「聖なる礼典」あるいは「秘蹟」ということばが、時々、これらの礼典を指して用いられることはありますが、その用法は、専門的に厳密でなく、その意図するところは、「定められた礼典」と同じ場合もあります。

バプテスマ

多くの宗教には、聖めを表わす儀式があります。しばしば、このような儀式では水、または油で儀式的に洗うことがなされます。例えば、ユダヤ人達は、キリストの時代よりかなり以前に、異教からの改宗者達に、割礼のみでなく、以前の汚れから聖められるために、水の中に完全に浸される浸礼のバプテスマを受けることを要求しました。バプテスマのヨハネは、強情なユダヤ人達に、罪を悔い改め異邦人の改宗者と同様に、バプテスマを受けるように宜べ伝えました。イエスは、悔い改めと聖さを語ったこの急進的な説教者のところへ行って、バプテスマを授けてもらいたいと頼まれたのです（マタイ3章13～17、マルコ1章9～12、ルカ3章21～22）。なぜならイエスにとっては、バプテスマは悔い改めるためではなく、罪のない生涯のしるしであったからです。それは、父なる神か、御子を、特別な任務と使命のために遣わされたことを公けに証するためでした。イエス御自身がバプテスマを受けられたのみでなく、ご自分の弟子たちに対し、イエスの弟子になった者にもバプテスマを授けるように命じられました（ヨハネ4章1～2）。さらに、イエスが昇天される直前に、次のように語られました。「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け」なさい（マタイ28章19）。バプテスマを授けるようにという命令ほど、はっきりとしたイエスの命令はありません。

前述したように、ほとんどのキリスト者は、この命令を守る必要性を認めています。それゆえ、バプテスマは、議論の余地のない教理です。しかし、バプテスマの意義に対する理解と、このキリスト教の重要な儀式を行なう方法については、いろいろな見解があります。そのすべてを記す訳にはいきませんが、この礼典を正しく理解し、正しく行なおうとするなら聖書の正しい答えを求めるための少なくとも三つの質問があります。

1. だれがバプテスマを受けるにふさわしい者でしょうか。聖書は、キリスト教のバプテスマは、信者に対してのみ行なわれるべきであるという見解を明らかに支持しています。新約聖書中のバプテスマに関するほとんどの言及は、「悔い改める」、または「信じる」という一方、あるいは両方の語句の後で用いられています。このことは、バプテスマには、前提条件があることを意味しています。例えば、ペンテコステの時の説教で、ペテロは次のように述べています。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい」（使徒2章38）。イエス御自身も次のように言われました。

「信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます」（マルコ16章16）。使徒の働き8章12では、ピリピの宣教に関して次のように述べています。「しかし信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた」。疑いなく、初代教会は、信者にのみバプテスマを授けていました。

しかし、以上のような処置は、非常に重要な問題を残しています。すなわち、福音に対して、自分で意識して応答することのできない幼児が死亡した場合、その霊的状态はどのようなものであるのかという問題です。明らかに、幼児は罪を意識していません、したがって、悔い改め、「主イエス・キリストを信じる」こともできません。この問題を取扱う際に、新約聖書の記事には、バプテスマを受けた者の中に子供も含まれていたと思われる箇所があります。例えば、ピリピの獄吏の「家族」

（使徒16章33）です。後に、第一世紀のキリスト教の学者達は、バプテスマを聖なる礼典あるいは秘蹟として理解し、幼児も洗礼を受けられるという教えを展開

しはじめました。このようにして、子供は、幼なくして死ぬなら、原罪の罪責を赦され、救われると保証されました。この教理は、ローマ・カトリックと、キリシヤ正教において受け入れられるようになり、プロテスタントの多くのグループもその立場を受け継ぎました。このような教えは、子供の両親には、安心を与えますが、聖書的根拠はありません。最初の質問にもどりますが、イエスや初代教会の人々にとっては、子供の霊的状态は問題になる事柄ではなかったようです。なせなら、主は、御自身の囲りに子供達を集めて、「天の御国はこのような者たちの国なのです」（マタイ19章14）と言われたではありませんか。

2. バプテスマの形式について聖書は何と言っているのでしょうか。新約聖書のギリシャの語バプティゾーということばは、「浸す、ちょっと浸す、沈める」という意味です。従って、聖書学者や歴史学者達は、イエスの弟子たちや初代教会は、改宗者たちに浸礼によってのみバプテスマを授けたと述べています。灌水礼（水を注ぐもの）および滴礼による洗礼は、簡便さと個々の文化に合うように適合させるために後になって導入されました。浸礼に対する例外は、最初、病弱者に限られていました。さらに後世になって、幼児に洗礼が施されるようになり、ローマ・カトリック教会では、浸礼の習慣は失われました。多くのプロテスタント教会でも、幼児洗礼を依然として行なっていますが、その方法は、滴礼か灌水礼によっています。キリシヤ正教のある教会と、プロテスタントのいくつかのグループは、信者にもバプテスマを授けるという考え方を支持し、浸礼によるバプテスマか、聖書的な唯一の方法でありこの宗教的儀式の完全な意味を表わすものであると主張しました。神の教会運動は、この見解を支持するグループに属しています。

浸礼のバプテスマによって表わされているものは何でしょうか。この方法によるバプテスマによって少なくとも三つの明らかに有意義な意味が表わされます。

(a) 潔め。からだ全体の外部を水で洗うことは、その人の全存在の心の中が潔められることの目に見える儀式による証です。「バプテスマによる再生」という考えを支持しているように見える聖書の箇所は、このような文脈の中で解釈されなければなりません。しばしば引用されるペテロの手紙第一、3章21は、「今あなたがたを救うバプテスマ」という所に主眼点があるのではなく、その後の「正しい良心の神への誓いであり」という所にあるのです。同様に、使徒の働き22章16では、「立ちなさい。その御名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい」というサウロに対するアナニヤの命令は、サウロが視力を回復され、キリストのための証人として召されていることを認識した後に与えられたものです。バプテスマは、このように、赦し、つまり、罪の咎から潔められることの象徴です。

(b) キリストの死および罪を葬ることを共に経験すること。これは、キリストの贖いのわざと、その人の生活における罪の力の終りを告げるものです。これは、ローマ人への手紙6章1～4において、パウロによって次のように見事に述べられています。「キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか」。コロサイ人への手紙2章12においても、パウロは同じ比喻を用いて、「あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ」たのですと述べています。以上のように、浸礼によるバプテスマは、キリストの死によって、罪の力を葬ることが可能になったことを表わすものです。

(c) 「新しいいのち」によみかえること。聖書のこの同じ箇所には、さらに復活の象徴—すなわち、水から出て来ることがキリストが墓から甦られたことを表わし

ているという象徴があります。このように、エチオピアの宦官のようにバプテスマを受けた人は、「喜びながら」（使徒8章39）自分の道を進んで行き、贖われた人としての経験を世の人に証することができます。

主の晩餐

聖なる食事あるいは祝宴は、多くの宗教における儀式の一部となっています。ユダヤ人達は、聖なる祭を祝う場合、いろいろな食物を広く用いました。イエスも過越しの祭りを守った直後に主の晩餐を制定されました。この物語は、新約聖書の4箇所に記載されています。すなわち、マタイの福音書26章26～28、マルコの福音書14章22～24、ルカの福音書22章19～20、コリント人への手紙第一、11章23～30です。これらの記事の中ではコリント人への第一の手紙のものが最も古く、最も完全なものです。この礼典が継続して行なわれるようにという期待は、イエスが次のように求めておられることによって明らかに示されています。「わたしを覚えて、これを行ないなさい。ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」（Iコリント11章25～26）。このように、イエスがもう一度地上に来られるまで、この礼典を繰返して行なうように弟子達に期待しておられたのは明白です。このことは、実際に起こりました。主の晩餐は、初代教会で行なわれ、以来キリスト者たちによって広く守られてきました。

この礼典は、三つの異なる名称で呼ばれています。コリント人への手紙第一、10章16～17では、「ユーカリスト」（感謝の杯）と「コミュニオン」（キリストの体にあずかること）という両方の名称が用いられています。コリント人への手紙第一、11章20では、この礼典は、「主の晩餐」の三つの名称は、教会では広く使用され、各々は、この礼典の種々の側面を強調しています。

この単純な礼典が象徴しているものは、一つの出来事—すなわち、イエス・キリストの十字架上で死に由来しています。日常の飲食という行為によって、イエスは受肉、犠牲、贖い、救い、感謝の祈り、交わりという偉大なメッセージをひとつに結び合わせ、それらに焦点を当てました。もっと組織的にまとめるなら、主の晩餐を守る際に、少なくとも四つの意義深い霊的なメッセージに注目すべきです。

1. これは記念のためのものです。「これを記念として行ないなさい」ということばは、第一に重要なものです。主の晩餐にあずかることによって、私たちはキリストの犠牲的死と、神の贖いの愛とを常に思い起こすことができます。パンとブドウ酒は、—キリストの裂かれたからだ、流された血という—犠牲の大きさを特に思い起こさせるものとなりました。聖餐にあずかることは、イエスと、彼が与えてくださった贈物とを思い出すことです。

2. これは感謝をすることです。感謝の側面は、この儀式の中で大きく聳えています。イエスは、パンとブドウ酒を祝されたのみならず、祝福の杯をも与えてくださいました。「ユーカリスト」（感謝）ということばは、この礼典に最もふさわしい名前です。主の晩餐に参加するとき、私達は、記念ということ以上に、神の御子を賜った神に深い感謝の念を表わさざるを得ないようになります。

3. これは、宣言することです。「あなたがたは、主が再び来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」ということばは、この礼典が伝道を目的としていることを示しています。この礼典を公けに守ることは、キリストの贖いのわざを自分が信じていることを世に証することです。イエスが与えてくださっている救いに自分があずかっていることを証しています。このような理由から、この証をなし得る人の

みが、主の晩餐にあずかるべきです。聖餐式は、福音を宣言するものです。

4. これは、交わりという意義があります。主の晩餐には交わりに関して二つの重要な意義があります。第一に、キリストの苦しみに共にあずかることです。このようにしてキリストとの交わりにあずかります。次に、他の贖われた人々と共にあずかることにより、「主の食卓」において、神のすべての民がひとつであることを表わすという要素があります。これは贖われたすべての者がひとつであり、平等であることを証するものでありキリストを救い主と告白するすべての者が神と交わりを持ちまたお互いと交わりを持つことの証です。

不幸なことに、聖餐式についてキリスト者の間には、意見の対立と論争がありました。この礼典は非常に重要なので多くのグループは、主の晩餐を守るための厳密な規則を規定し、その意味に対して、独自の神学的解釈をして来ました。少なくとも四つの見解が広く一般に受け入れられていますが、それらの見解は聖書によって支持されていないので退けられるべきです。

1. **化体説**。この見解は、九世紀に発展しましたが、パンとブドウ酒は、(司祭の)祝福する行為によって実際に、キリストの肉と血となると考えています。ですから、聖餐にあずかる者は、文字通りキリストを自分のからだの中に摂取することになります。このような考えは、主の晩餐の記念としての側面を否定し、霊的な意味ではなく、肉体的意味にその価値を限定してしまうことになります。

2. **キリストか聖餐式のたびごとに十字架上で犠牲になるという説**。「主の死を告げ知らせる」ことは、主の死を繰り返さないという命令ではありません。主の晩餐は十字架の死を繰り返すことではありません。ヘブル人への手紙の中で、「キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが」(9章28)と記されています。

3. **主の晩餐は、それ自体で、救いにとって有効なものであるという説**。この考えは、主の晩餐のパンとブドウ酒にあずかれば、悔い改めなくても赦しと救いが得られると主張します。この考えは新約聖書の他のすべての基本的教えと矛盾しています。

4. **主の晩餐は、「適切」に執行された時のみ妥当なものであるという説**。聖餐とそれに続く儀式に誰が「あずかる」ことができるかに関し、厳密な規定を設けることにより、多くのグループは、主の晩餐にあずかることのできる人を規制して、聖書から逸脱してしまっています。「閉鎖的」聖餐式(訳者注・・・自分の教派や教会に属する人以外には聖餐にあずかることを許可しないこと)、あるいは聖餐式の執行者は「使徒的継承」の枠内にある人(訳者注・・・ローマ法王から権威が与えられた人)でなければならないと限定するのは明らかに聖書的ではありません。

この聖餐式を守る頻度に関する意見はいろいろありますが一毎日というものから一年に一度というものまで—これらはあまり重要な問題ではありません。この問題について、聖書は何も指示していませんから、自分で良いと思うようにすればよいでしょう。たとえば、神の教会運動のほとんどの集会では、少なくとも年4回は守っています。あるグループは、毎週守っています。真に重要なことは、敬虔な思いと、その意義を良くわきまえて、主の晩餐を守ることです。

洗 足 式

既に述べたように、この礼典は、他の二つのものほど広く行なわれてはいません。たとえそうであっても、この礼典は明白な、聖書的基盤を持っています。ヨハネの福音書13章1～17には、イエスか弟子達の足を洗われた詳細な記事が記されて

います。足を洗った後、イエスは弟子達に結論として次のように言われました。「それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです」（14～15）。

初代教会で、この礼典が執行されたという唯一の聖書の証拠は、テモテへの手紙第一、5章10にあります。そこでは、「聖徒の足を洗うこと」が、困窮しているやもめが食物の配給にあずかるための一つの資格となっていました。このことは、洗足式に言及していることとすることも可能ですが、それと同時に自分の家を訪れた教会からの訪問者に歓待を尽くさなければならないことを物語っていると解することもできます。足を洗うことは、当時の文化では旅人に対する当然なすべき態度とされていました。

あまり多くの証拠を挙げることはできませんが、イエスのこの特別な命令を無視することはできません。洗足式が礼典のひとつとなったのは、このような聖書の教えに基づいていたからです。この礼典は広範囲に行なわれてはいませんが、キリスト教の歴史を通して、何らかのグループによって、この礼典が行なわれなかった時代はありませんでした。一六世紀に、この礼典が、ある急進的改革派と言われるグループによって再び行なわれるようになりました。一九世紀の神の教会の初期の指導者たちは、このイエスの命令を読み、礼典として洗足式を行ないはじめました。神の教会では洗足式の執行が、「交わりを試すもの」となったことはありません。もし、米国か、あるいは外国のある教会が、この儀式を守っていなくても、何ら問題にはなりません。

洗足式に参加する人達は、それが大変意義深い経験であることを発見します。イエスの命令に従ったという満足感に加えて、この行為には、二つの大きな意義があります。

1. 謙遜。 イエスの弟子達の何人かが、自分達のなかで、だれが一番偉いかと争っていた直後に、イエスは弟子の足を洗われました。イエスが彼らの足を洗ったのは、本当は、彼らの傲慢と高い地位を得ようとする野心を叱責するためでした。この模範によってイエスは、すでに彼らに教えていた、あなた方のうちで一番偉い者は、仕える者となりなさい、ということの具体的例を示されたのです。

2. 奉仕。 自分の仲間が持っている要求に仕えていくことは、キリスト教のメッセージの重要な一面です。しもべとしての姿は、イエスも受け入れておられました。従ってイエスの弟子達もしもべの姿をとるべきであるのは当然のことです。他人の足を洗うことは、すべてのキリスト者が果たすべきしもべの役割を表わしています。

これらの礼典のすべて、あるいはそのひとつを守る際に、これらの礼典それ自体だけでは、単なる空しい儀式に過ぎないことを覚えておくのは重要なことです。しかし、これらがイエス・キリストへの服従と、キリストが意図された目的のために行なわれるなら、人間にとって、福音によって生きることが最も重要なこととなるための一手段として用いられるのです。イエスの地上での最後のことばは、服従するよという呼びかけであると同時に、約束でもあるのです（マタイ28章20）。

第10章 神の肉体的いやし

聖書の引照箇所

詩篇 103篇 1～3

イザヤ書 35章 5～6、42章 6～7、53章 4～5、61章 1

マラキ書 4章 2

マタイの福音書 8章 16～17、9章 1～2、35～36、
10章 1、7～8、14章 14、17章 19～20

マルコの福音書 1章 41、5章 18～20、6章 12～13、
16章 17～18

ルカの福音書 4章 18～21、10章 9

ヨハネの福音書 14章 12～13

使徒の働き 3章 1～11、5章 12～16

ローマ人への手紙 8章 23

コリント人への手紙第二 12章 4～11、28～30

ヤコブの手紙 4章 3、5章 14～16

イエスは、肉体的いやしに非常な関心を持っておられましたが、その働きの主な焦点は、人格全体に向けられていました。イエスのいやしは多くの場合、罪の赦しを伴っており、肉体的、霊的、精神的健康の間には、明らかに密接な関係があることが認められていました。それゆえ「精神身体的」という心理学的用語が使用されるより、ずっと以前から、イエスは、肉体—精神—霊の関係が重要であることを強調していました。イエスは、人生のあらゆる面に健康をもたらすために来られたのです。

「神の宮」としての人間のからだ（Iコリント6章19）という概念についても、一言述べたいと思います。この概念は、人が、自分のからだを、敬意、あるいは、畏敬の念をもって扱うようにという、人間の側の責任を意味しています。からだは、驚くべき複雑な創造物であり、創造主の知恵を賛美するものです。からだは、最高の扱いと、配慮を受ける価値のあるものです。興味のあることですが、神の教会運動の初期の指導者達は、いつも三冊の本を持って旅をしていました。即ち、聖書、賛美歌、そして健康についての本です。神癒を宣べ伝えると同時に、食事、運動、健康な生活習慣を人々に教えました。たとえば、J・クラント・アンダーソン著『神癒』（1926年）は、健康のための六つの法則を唱えていました。すなわち、正しい食事、正しい飲物、正しい呼吸、正しい思考、正しい運動、正しい睡眠です。

しかし、最善の配慮をしても、万一、負傷したり、からだをこわしたり、病気にかかったりした場合、「信仰によって献げられる祈りは、病人を回復させ、主がその人をいやしてくださる」ということを強く確信することが必要です。

第11章 終末論（最後の事柄）

聖書の引照箇所

マタイの福音書 4章 17、24章 1～44、25章 31～46
 ルカの福音書 1章 32～33、16章 16、17章 20～21
 ヨハネの福音書 5章 28～29、14章 1～4、18章 36～37
 使徒の働き 1章 9～11、17章 31、24章 14～16
 ローマ人への手紙 2章 11～16、14章 17～18
 コリント人への手紙第一 4章 20、15章 35～58
 ピリピ人への手紙 3章 20～21
 テサロニケ人への手紙第二 4章 13～16、5章 1～3
 テサロニケ人への手紙第二 1章 7～10
 ヘブル人への手紙 9章 27～28
 ペテロの手紙第一 4章 7
 ペテロの手紙第二 1章 11、3章 10
 黙示録 1章 7、20章 1～14、22章 7

キリスト教の終末論について、聖書が実際に何と教えているかに、細心の注意を払うことが非常に重要となります。憶測の幻想にとらわれたりすることを避け、混乱していることを明らかにするために、未来に関するキリスト教教理の全体を検討する必要があります。キリスト教の聖書的観点から見ると、「終末の事柄」の全体像は、六つの基本的部分から成っています。次にその各々について簡単に述べることにします。

神の国

イエスが良く使われた「神の国」ということばを正しく理解することは、キリスト教の終末論のすべての基礎となります。イエスは、「神の国」についてしばしば言及され、その意味を証明するために、多くのたとえを用いられました。その教えの内容は、神の国の四つの主要な特徴を示しています。

1. 神の国は、霊的なものであり、政治的、地理的なものではありません。それは、宇宙において神が支配される全領域を示しています。ルカの福音書17章20、21には、イエスが神の国について非常に明確に述べている記事があります。即ち、「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある。』とか『あそこにある。』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は あなたがたのただ中にあるのです」。使徒パウロも同様に語っています。「神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです」（ローマ14章17）。異なった比喩を用いて、彼は同じ思想を表わしています。「神の国はことばにはなく、力にあるのです」（Iコリント4章20）。このように、目に見える教会とは異なり、神の国は、肉体的目では見ることかできないのです。神の御支配を知り、それを受け入れるところには、どこにでも、また、だれの中にでも、神の国はあるのです。

2. 新約聖書で用いられている「神の国」の語義からすると、キリストが神の国の創始者です。キリストはメシアとして、旧約聖書で約束されていた来たるべき王に関する預言をされました。イエスは宣教の最初に、「天の御国が近づいた」（マタイ4章17）と宣告されました。キリストが王であることは、彼の地上での宣教、死、および復活によって、確証されました。ヨハネの福音書18章36、37

にある通り、イエスは、神の国がいかなるものかを正しく主張することができました。「わたしの国はこの世のものではありません。・・・わたしが王であることは、あなたが言うとおりです。わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです」。この聖句は、キリストは本当に王であるが、地上の王国の王ではないことを明らかにしています。イエスは「もしこの世のものであったなら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人たちに渡さないように戦ったことでしょう」と語っています。ある千年王国前再臨主義者達が主張しているように、地上の権力が神の国を建設するという根拠はどこにもありません。神の国は、神の力により、イエス・キリストによって、すでに実現しているのです。

3. 神の国は、現在存在し、そして、イエス・キリストの地上での宣教の時以来存在しています。イエスは、「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これにはいろいろとしています」(ルカ16章16)。と言われました。このように、旧約聖書の預言はキリスト教において成就し、キリスト降誕以来、すべての贖われた人々の心の中において、キリストの支配が行われています。神の国が実現するために、未来の出来事を待つ必要はありません。

4. 神の国は氷遠です。それは、現在存在すると同時に未来も存在し、時間や、出来事によって制限されないものです。神の国は未来の特定の時に実現すると限定できるものではありません。ペテロの手紙第二、1章11は、神の「氷遠の御国」について言及しています。イエスの誕生をマリヤに告げている天使のことばに、「その国は終ることがありません」というものがあります。神の国は、キリストの再臨や、終りの時によって終結するものではありません。水遠まで続くものです。

キリストの再臨

初代教会の信仰で重要な側面は、キリストの昇天の後、いつかキリストが再び地上に戻って来られるという期待を待っていることです。その強調のされ方は異なっていますが、昇天以来、この期待はあらゆる時代に抱かれてきました。この期待を裏付ける聖句は多くあります。イエスは、十字架に付けられる前に、弟子たちに次のように述べられました。「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです」(ヨハネ14章3)。イエスの昇天の記事で、天使は次のように述べています。「ガリラヤ人たち。なせ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります」(使徒1章11)。使徒パウロは、「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます」(Iテサロニケ4章16)と言っています。黙示録で、ヨハネは次のように述べています。「見よ、彼が雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る」(黙示録1章7)。このほかにも再臨に関する言及は、多くあります。

これらすべての証拠から、キリストの再臨に関して、キリスト者の間には、あまり意見の相違がありません。しかし、いつとか、何度とか、キリスト再臨の後とどのようなことが起こるかなど詳細の点については、多くの異なった意見があります。再臨がいつ起こるかに関しては、詮索する必要は少しもありません。イエス御自身、再臨の「しるし」と世の終りについて語られた後、明確に次のように述べておられます。「その日、その時がいっであるかは、だれも知りません。天の御使いた

ちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます」(マタイ24四章36)。他の聖書の箇所にも、再臨が不意に、突然、「真夜中の盗人のように」(Iテサロニケ5章2)来ると記されています。それにもかかわらず、再臨がいつあるのか推測したり、再臨はいつだと予言したりする人達があります。初代教会は、これが、まもなく起こると考えていたことは明らかです。黙示録の終りに、ヨハネは、二度も「見よ。わたしはすぐに来る」(22章7、12)と記しています。今日に至るまで、多くの人々が、再臨の日を定め、特別な準備をしたりしました。ある者は、キリストはすでに再臨されたと主張しました。ある者達は、間隔を置いて、何度も再臨されることを待ち望んでいます。このような推測は、それが、千年王国後再臨主義者であれ、千年王国前再臨主義者、あるいは、ディスペンテーション主義者達によるものであれ、聖書に基くものではありません。

時の終り

キリスト再臨に関連するすべての聖句は、再臨によってこの世の終りが来ることを明白に述べるか、暗に示すかしています。マタイの福音書24章3で弟子達かイエスにした質問は、この二つの出来事を明らかに結び付けています。彼らは「お話し下さい。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終りには、どんな前兆があるのでしょうか」と言いました。ヘテロの手紙第一、4章7では、キリスト再臨が「万物の終わり」と結び付けられています。千年王国の間に、悔改める機会がもう一度与えられると考えている人々は、この世の終わりには、キリストの贖いの業も終わりを告げるといふ、重要な面を見逃しています。ヘブル人への手紙9章28は、次のように明白に述べています。「キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。」。このように、キリストの再臨により恵みと救いの時は終わり、私たちが知っているように、この世が滅ぼされるのです。ペテロの手紙第二、3章10には「天は大きな響きを立てて消え失せ、天の万象は焼けくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます」と記されています。

死人の復活

「終わりの日」に起こることを述べている聖書の記事の中には、既に死んだ人達の復活に対する言及も含まれています。これは、全人類に関係がある出来事です。しかし、それらの言及は、死人の復活の詳細や経過や、出来事の順序を述べてはいません。このために、聖書学者やその他の人々が、詳細に述べられていない記事をつなぎ合わせ、起こるのではないかと思われることを推測によって加える余地が生じたのです。死人の復活については、聖書に述べられている明確なことは、二点しかありません。

1. 過去に存在していたすべての人が復活する、人類全体の復活があるだろうということです。ヨハネの福音書5章28、29には次のようなイエスのことばがあります。「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます」。また、使徒パウロは、「義人も悪人も必ず復活する」(使徒24章15)と述べています。すでに引用した黙示録1章7は、「すべての目が彼を見る」と言っています。

2. この全人類の復活の過程において、ある聖句は、一定の順序があることを示唆しています。パウロは、主の再臨に関して、「キリストにある死者が、まず初め

によみがえり」（Iテサロニケ4章16）と述べています。マタイの福音書24章30、31に記されているイエスのことばは、天使達が、どのようにして、「天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集め」るかを語っています。ある解釈者たちは、義しい者達の甦りと、悪人の甦りとの間には、しばらくの間隔（ある者は7年、他の者は千年と考える）があると推測しています。このような時の経過については、聖書のどこにも記されていません。イエス御自身のことばは、これらが続いて起こることを示唆しています。「墓の中にいる者がみな出て来る」と述べた後で、「善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受ける」と語っておられます（ヨハネ5章29）。

最後の審判

新約聖書の教えの中で、最後の審判が事実であることほど十分な証拠のあるものは他にありません。福音のメッセージ全体の底には、あらゆる人は、生前に行った行為に対して、神に申し開きをする義務があるという基本的な前提があります。マタイの福音書25章31～46は、審判の様子を鮮やかに伝えています。すなわち、「羊」と「山羊」とが分けられ、次いで、人の子の右側の者達と、左側の者達との描写がなされています。審判の基準は、ここでは、「私の兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとり」に何をなしたかである、と規定されています。（40、45）。パウロは「神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの実証をすべての人にお与えになったのです」（使徒17章31）と語っています。最後の審判について語っている黙示録20章では、「人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた」と述べられています（13）。

審判の基本的基準は、福音です。イエスは、御自身を拒んだ者達に「私を拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばく者があります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです」（ヨハネ22章48）と警告しています。パウロは、「そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます」（Iテサロニケ1章7、8）と述べて、このことを再確認しています。

福音を聞いたことのない者達に対する審きの基礎に関しては、聖書はごくわずかしか述べていません。この問題に、パウロは、ローマ人への手紙2章11～16で触れています。彼は異邦人についてふれ、「彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし」（15）と記しています。これが、「神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばく日に」（16）行なわれる審判の基礎であると述べています。いずれにしろ、審きはすべての人々に対して、公平で、正しく、外見によってでなく、真実に基づいてなされるのです。

報いと、罰 — 時を越えて永遠へ

終わりの時は、存在が終わりを告げるものではありません。人の人格と、意識とは、永遠に存続します。復活したからだがどのようなものかは、知られていませんが、現在のからだとは異なったものです。パウロは、キリストが「私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださる」（ピリピ3章21）

のを待ち望んでいました。これは、復活された主のからだと同様な氷遠のからだ—すなわち、形はあるが、霊的で、死なないからだ—のことを意味しています。

パウロは、このことをさらに詳しく、コリント人への手紙第一、15章で述べ、「死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです」（52、53）と述べています。

しかし、存在し続けることも、その存在の性質がいかなるものであるか明らかにされないならば、意味がなくなってしまうでしょう。この点で、最後の審判の結果が、重大になってきます。さばきによって義なる者と定められた人々は、永遠のいのちの喜びにあずかるように招かれ、不義なる者と定められた人々は、氷遠の審きと、罰に定められます。義人は報いとして、天国に入れられ、悪人は、罰として、地獄に入れられます。このそれぞれの詳しい描写は、旧約と新約の著者たちによってなされています。その描写のあるものは、きわめて、感覚的で、物質的なものです。例えば、天国に対しては「純金の大通り、碧王の城壁、真珠の門」という表現が用いられ、地獄に対しては「火と硫黄とが燃えている池」という表現が用いられています。

これらの表現が、どの程度象徴的であり、どの程度文字通りであるかは、私たちには本当には解りません。しかし、主と共にいられる天国は良い所であるということは確信することかできます。同様に、キリストから氷久に引き離されている地獄は、悪い所だと確信することもできます。

未来に対する、キリスト者としての私たちの信仰は、将来に関するカラー写真に基づいているのではなく、福音の約束に基づいているのです。イエスが、時と氷遠にわたって、「私たちを救ってくださる」ことを、私たちは知っています。キリストを、救い主として受け入れるか、拒むかは、各人の判断によることも知っています。私たちはまた「肉体にあってした行為に応じて」審かれることも知っています。永遠とは永久に存続することであるということも、知っています。したがって、使徒パウロとともに、「私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています」（使徒24章16）とすることがができます。

地上にいる者はだれも未来のことを真に知りませんか、あらゆる人は—この世にあって、永遠においても—未来があることを確実に知っています。このことを念頭に置きながら、パウロが、未来について美しいことばで語っている適切な結論について思いめぐらすのは意味のあることです。

「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから」（Iコリント15章58）。

第12章 キリストの弟子としての道とその使命

聖書の引照箇所

- マタイの福音書 11章 28～29、25章 14～46、28章 19
 マルコの福音書 10章 17～22
 ルカの福音書 9章 2、10章 1～20、14章 26～27、33
 ヨハネの福音書 3章 16、10章 10、13章 34～35
 使徒の働き 1章 8
 ローマ人への手紙 10章 12～15
 コリント人への手紙第二 8章 5
 テモテの手紙第二 4章 5
 ヨハネの手紙第一 3章 16～18

「教理」について語る時、普通、知的な面のことだけを考えがちです。すなわち、真理として示されて来た教え—信仰の真理—信じて来た事柄などです。厳密に言って、この限定された意味は正しいのです。「教理」ということばは、文字通りには、「教え」または「理論」という意味です。しかし、もっと完全な意味において、教理は、人間のあらゆる面と関係を持っています。すなわち、知性はもちろんのこと、意志、感情、責任感、行為にも関係があります。頭だけでなく、心や手足までも含んでいます。それはまた、何をなすか、どこへ行くか、どのように行うかに関係があります。考えていることが、その信仰や確信にふさわしい行動を起こさせるようにならない限り、頭で考えた教理は、それがいかに「正しい」ものであっても、あまり意義がありません。キリスト者の行為と、行動の教理について語るのは、全く正しいことです。このような意味において、イエスは、教師であられたと同時に、行動の人であったということ覚えておいた方がよいでしょう。イエスは、神、救い、教会、神の御国、そして将来について、基本的な神学的理解を教えられました。その上で、これらの教えの意味を、人々と交わり、彼らの必要に答え、他者の救いのために、御自身の命を捧げることによって、示されました。この神学と、行為を結合させることの中から、キリスト教的視野を持った倫理、道徳、生活様式、対人関係、社会的責任、対外的活動、証しの基礎が生じて来るのです。このようにして、キリスト教の信仰はもっと具体的なものとなり、教えから実践へ、いろいろな見解から徳へ、学問的なものから行動へと変化して行きます。

キリスト教信仰のこの側面には、歴史的にも、現代の種々のキリスト者のグループにおいても、常にあまり重点が置かれていませんでした。現代では、社会問題に対してどの程度関心を払うべきかということは、キリスト者の間で、かなりの論争を引き起こし、分裂さえも生じています。ある人々は、主として、行動に主要点を置き、「社会福音」の主唱者というラベルを付けられています。他の人々は、個人的救いを強調するあまり、社会問題を取扱うキリスト者の責任を無視しています。この論争に関して、神の教会は、その歴史を通じて、「あれか・これか」という両極端の立場ではなく、「あれも・これも」という立場を取ってきました。もちろん、福音的運動としては、同時に、神の教会は聖い生活を唱道して来たので、キリスト者としての奉仕の面も無視してきた訳ではありません。傷ついている人の必要に答えるために相当な配慮を払い、不公平な悪を是正し、社会の中の差別をなくす運動に係わってきました。他の福音的ホーリネスグループも、最近、このような社会的関心に目覚めてきていますが、神の教会では、その最初から、社会問題を

取り上げてきました。ですから、この点を、神の教会運動の特色ある教理の一つとして、その中に含めることができます。

この問題を簡単に分析してみても、キリスト教の行動に関する教理には、多くの面があります。しかし、さらに深く掘り下げると、すべての重要な面は、二つのことば、即ち、「弟子性」と「宣教」ということばにまとめることができます。これらのことばは、互いに密接に関連していますが、その両者の間には、重要な違いも見られますので、各々別々に、定義しその内容をくわしく述べたいと思います。

弟子としての道

弟子とは、従う者であり、学ぶ者です。キリストの弟子であるとは、イエスに従う者であり、イエスから学ぶ人のことです。キリスト者の弟子性の要点は、主であり、教師である、キリストの熱心な学生となり、キリストの精神を受けつぎ、その理想を熱心に追い求め、その教えに基づいて行動するように導かれることです。イエスは、弟子となるように人々に呼びかけました。「私のところに来なさい」、「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい」（マタイ11章28、29）と言われました。弟子となることは、このイエスの招きに答え、くびき（奉仕）を負い、イエスから学ぶことです。御自身の弟子—「十二弟子」およびその他の多くの弟子—を招かれた時、イエスは、弟子性について、多くのことを語られました。いろいろな点で、イエスに従うことは、容易でないことを明らかにされ快適な生活や、地上での利益などによって誘うようなことをなさいませんでした。実際、数々の場面で、御自身の弟子となることがいかに困難なものであるかを強調されました。弟子性の教えに関するイエスの教えの中で、少なくとも次の5点が浮かび上がってきます。

1. キリストの弟子となることの代価を、現実的な目で評価しなければなりません。この点に関する最上の例は、富める者に対するイエスの答えです（マルコ10章17以下）。この若者は、イエスが語られたことに、非常に魅惑を感じたことは確かです。この人は熱心に求めていました。彼は弟子になりたかったのですが、その代価を払う準備ができていませんでした。その代価を知った時、聖書の記事によると「このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った」（22）と述べられています。イエスは、無分別や、浅薄な決断を望んでおられません。この問題は、塔を建てようと考えている人間の例話の中でも明らかです。

「塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちひとりでもあるでしょうか」（ルカ14章28）とイエスは質問しておられます。弟子になるということは、単にキリストに従おうとすることだけではありません。それは、最後まで—自分が死ぬまでも—キリストと共に歩むという献身をすることなのです。

2. キリストに従うことを、自分の生活の中で、まず第一にしなければなりません。この点に関するイエスの教えは、非常に明確であり、初めて読むと、途方もなく苛酷なように思えます。例えば、ある時、主イエスは、自分に従って来ている大群衆をふり返り、「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、その上自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません」（ルカ14章26）と言われました。聖書学者たちは、これに言及して、イエスが語られたことばの中で一番厳しいものだと言っています。「憎む」ということばを文字通りに受け取るならば、非常に困難な言明です。しかし、イエスの意図は、人生の中で、イエスの弟子であることが、最も大切なものでなければならないという

真理を強調することにあつたのは明らかです。神との関係は、他のいかなる物よりも重要です。イエスは、この点をその何節か後でも次のように語って確認しておられます。「そうゆうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません」(ルカ14章33)。また、マタイの福音書8章18～22、ルカの福音書9章57～62にある「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい」ということばも同じ内容を伝えています。

3. 神が与えておられる特別な任務と責任を受け入れ、果たさねばなりません。このことは容易ではないかも知れません。イエスにとっての使命は、御自身のいのちを献げることでした。イエスはこれを、弟子達に与えられた任務の象徴として用いられました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」(マタイ16章24)と言われました。別の機会には、弟子達に向かって「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません」(ルカ14章27)と言っておられます。ある人々にとっては、その使命は、専任の宗教的職業—すなわち、牧師、教師、宣教師—につくことであるかも知れません。すべての人々にとって、キリストの弟子になることは、神学的に理解していることを、その態度と、行動に移すことです。それが、信仰において生きる—思想においても、行動においても—ということですが、それは、毎日、一瞬一瞬、あらゆる状況の中でためらうことなく、外れることなくキリストに従うことを意味しています。キリストの真の弟子は、その生活のあらゆる面—仕事、余暇、友情、趣味—においてキリストに従います。このことは、絶えず祈り、聖書を学び、瞑想をすることによって神と親しい関係を保てるように努力することをも意味しています。このように、弟子性とは、神から与えられた責任を死に至るまでも果たすことです。

4. 自分の持っている物の良い管理者とならねばなりません。これには、自分の体、精神、健康、力、技術、時間、財産も含まれます。信仰が、時間や物質的な面でも働かない限り、真に働いているとは言えません。良い管理人は、自分の自由になるすべてのものを生産し、保存し、使用することに心を用いなければなりません。この点でも、イエスは、たとえという形で特別な指導をしておられます。タラントの話(マタイ25章14～30)において、各人は同等の才能は持っていないかも知れないが、それを有益に用いる責任があることを明確に教えておられます。神から与えられたものの良き管理人であることは、貧しい人々に分け与え、この世における神のみわざの前進のために献げることをも含んでいます。使徒パウロはマケドニアの教会の人々について語ってこのことを良く示しています。「彼らは自から進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました」(Ⅱコリント8章3、5)。弟子であることは、すべてのものは神のものであり、私たち管理の下で、神の栄光のために用いる責任があると認めることを意味しています。

5. 弟子であるということは、あらゆる意味で、他の人を愛するという基本的前提を受け入れなければなりません。愛は、イエスのすべての教えの中で中心的なものです。彼はその教えの中で明確に、次のように述べています。「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい」(ヨハネ13章34～35)。従って、愛することが、キリストの弟子であるか否かの本当のテスト—明確な証拠—になります。この愛は、人と人をへだてているすべての障壁—

人種、階級、皮膚の色、身分、言語、国籍—を越えて人を愛することを意味しています。愛がなければ、人種、部族、国家間の平和は、決して達成できません。愛のみが、本当の兄弟愛、友情を永続させる基礎なのです。すべての人々に対する愛が、キリスト者の奉仕の基本的な動機です。これこそ、全世界にキリストの福音を宣べ伝える原動力なのです。

宣 教

宣教という意味の英語の「ミッション」ということばは、ある特別な任務や、特定の使命のために「派遣する」あるいは「派遣される」という意味です。キリスト教では、「ミッション」ということばは、キリストの福音を宣べ伝え、キリストを救い主また主として受け入れるように招き、キリストの名において貧しい人々に仕え、あらゆる種類の悪に抵抗するという意味です。「ザ・クリスチャン・ミッション（キリスト者の使命）」という時には、普通用いられている「クリスチャン・ミッションズ（キリスト教の宣教）」ということばよりも、もっと広く、深い意味があります。後者の表現は、より限定された意味において用いられており、それは、全世界に「福音を広める」ために種々のグループで組織化された努力をすることを指しています。普通の場合、教会や団体から伝道と奉仕のために外国へ派遣されている人々を宣教師と呼んでいます。これらの人々は、派遣する教会の求めに応じて出て行きます。しかし、「キリスト者の使命」とは、このような組織化された、計画の下でなされる仕事に限定されず、すべてのキリスト者に対して用いられます。キリストの弟子になる人は、だれでも、その信仰の証しをするようにこの世に遣わされています。これは、あらゆる点において、人々の前でキリストのように生きること、キリストを知らないため、あるいは救い主として受け入れないために、「失われて」いる人々に福音を伝え、キリストの名において人々の必要に仕えていくことをも意味しています。

すべての忠実なキリスト者は、以上のような任務を果たすために「遣わされている」のですから、宣教団体によって派遣されている、ある特定な人々を「宣教団」と呼ぶ方がより適切ではないでしょうか。このように理解すると、「だれが、これらの宣教者を遣わされるのですか」という質問がすぐに発せられるでしょう。この点に関しては、幸いなことに、新約聖書に多くの指針があります。まず、イエス御自身が遣わす方であることに注目しなければなりません。イエスは十二弟子を彼に従うように召され、「それから、神の国を述べ伝え、病気を直すために、彼らを遣わされた」（ルカ9章2）とあります。イエスの指示を受けた後、「十二人は出かけて行って、村から村へと回りながら、至る所で福音を述べ伝え、病気を直し」ました（ルカ9章6）。これに加えて、さらに多くの弟子たち—72人—を二人一組にして、同様な使命のために遣わされたと記されています（ルカ10章1～20）。「彼らは出て行き、喜んで帰って来て、こう言った。『主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します』」（17）。

イエスのこれらの弟子達が遣わされた地域は、パレスチナに限られていました。しかし、イエスの最後の命令では、この地域は、非常に広範に拡大されています。イエスは復活の後、弟子達に現れて、「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」（マタイ28章19）と命じられました。また昇天の直前に、イエスに従おうとする人々の責任を再度確認されました。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

(使徒1章8)。これらの記事は、だれが、「派遣者」であり、派遣される者が行くべき範囲はどこまでかということに関して疑う余地がないほど明らかに示しています。宣教者は、キリストの權威の下に出かけ、キリストの名により、証しをします。

「行け」という命令の背後にある活力に満ちた力も非常に明白に示されています。それは新約聖書で、最もしばしば用いられるヨハネ3章16の聖句によって、最も良く表わされています(傍点の箇所にご注意)。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」。この愛に答える方法は、ヨハネの手紙第一、3章16に示されています。「キリストは、私たちのために、ごじぶんのいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです」。この宣教目標が全世界であり、その潜在的力がいかに大きいかは、使徒パウロの次のことばによってよく表現されています。「ユダヤ人とギリシャ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。『主の御名を呼び求める者は、だれも救われる』のです。」(ローマ10章12~13)。これは、宣教者にとって何という大きな挑戦でしょうか。

これらの聖書の記事と他の同様な聖句から、キリスト者の宣教には、相互に関連のある三つの側面があることが明らかになります。それは、証し、伝道、奉仕です。これらはすべて、同じ目的を持っています。すなわち、全世界の人々にキリストを知らせ、それによって彼らがキリストを信じ、永遠のいのちを持つようになるためです。ある意味で、これらの側面は同じ目的を達成するための三つの異なった手段だとも言えます。各々を簡単に考察することは、お互いがどのように関連し、キリスト者の宣教を実現するのにどのように役立っているかを明らかにするのに役立ちます。

1. 証し。証しとは、各人が知っていることに関して証言することです。イエスが、「あなた方は、わたしの証人となる」と言われた時、それはイエスに従う者は、イエスについて知っていることを、他の人々に告げる責任があると言っておられるのです。贖れた者たちは、他者に知らせる良い知らせを持っているのです。救いを経験した人々は、どのようにしてそれが起こったかを、他の人に伝えたいと思いますし、またそうしなければならないのです。この「告げる」ということば種々の方法でなされます。ことばを使うことはもちろんですが、行為や、態度や、りっぱな生活をするによってもなされます。「隠れた」キリスト者などは実際には存在しません。すでに述べた弟子としての資質のすべては、キリストが、その弟子のひとりになされたことを公に証言するのに役立つと同時に、宣教者自身にとってもその靈的成長に役に立ちます。社会的接触がかなり限られている人でも、他の証人—キリスト教の文書(特に聖書)、宣教師、組織的な奉仕のプロクラム—を送ることに関与することで、自分のあかしの範囲を拡大することができます。

2. 伝道。英語の disciple (弟子) ということばは通常、名詞として用いられますが、これは動詞としても使用されます。「弟子とする」とは、他の人を導いてキリストの弟子とすることを意味します。伝道ということの完全な意味は、福音を宣べ伝えることだけでなく、キリストを受け入れることの意味を教えること、弟子にふさわしい生活様式を具体的に示すことを含んでいます。伝道には、個人をキリストに導くことと同時に、教会を形成することが含まれています。この教会は新しい回心者を獲得する中心基礎となり、それらの人々をキリスト者として成長させ、これらの成長したキリスト者をさらに証人(宣教者)として世に送り出し、もう

一度この過程全体を繰り返すようにするのは、パウロは、この伝道のサイクルを次のように述べています。「しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。『良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう』」（ローマ10章14～15）。すべてのキリスト者は、弟子であると同時に、弟子を作る人です。派遣される者であると同時に派遣する者です。すべての者が、神によって、伝道者となり、イエス・キリストの救いの恵みをまた経験していない人々に、福音を伝えるように召されています。

3. 奉仕。キリストはあらゆる人が、意義深い、充実した生活をするように望んでおられます。イエスは「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」（ヨハネ10章10）と言われました。不幸にして、世界の異なった社会や経済構造のもとでは、すべての人々が、「豊かな」いのちを与えられているとは言えません。世界のあらゆる国には、先進国にも、発展途上国にも、貧しい人々がたくさんいます。病人や身体障害者がおり、差別され、権利を侵害されている人々、貧欲で不正な権力者によって搾取されている人々、多勢の飢え、着る物や住居がない人々がいます。これらの貧しい人々や孤独な人々、家族やその他の問題で悩み苦しんでいる人々に対して、キリスト者は、二重の使命を負っています。一つはそれらの人々に、キリストが救い主であることを告げることであり、もう一つは、キリストの名によって、それらの人々の必要に仕えることです。使徒ヨハネは、イエスの次のようなことばを記しています。「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのをみてもあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまるでしょう。子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか」（Iヨハネ3章17～18）。

以上のように必要としている人々に奉仕するキリスト者にとって、最も大切なことは、それが、運命にかかわるものということです。弟子達に対する最後の講話の中で、イエスは、最後の審判の時に正しい者と正しくない者とを分けることを述べておられます（マタイ25章31～46）。イエスは、正しい人とは、「これらわたしの兄弟たち、しかも、最も小さい者たちのひとり」に、空腹の時に食べ物を与え、渴いている時に飲ませ、旅人を泊まらせ、裸な者に着せ、病人の世話をし、牢にいる者を訪ねる者であると定義しています。このような人々が、「世の初めから、あなたがたのために備えられた御国」（マタイ25章34）を受け継ぐのです。これらのことをしなかった者たちは、「永遠の刑罰にはいる」（46）ように定められます。永遠にわたって、キリストの弟子でありたいと思う人にとって欠くことのできないものなのです。

以上のように、キリスト者の信仰とは、一連の信仰箇条を受け入れることだけではなく、主イエスに従うことと、その使命を達成することをも含んでいるのです。

第13章 成長する信仰

聖書の引照箇所

- ヨハネの福音書 8章 32、14章 16～17、16章 13～15
 コリント人への手紙第一 13章 11
 エペソ人への手紙 4章 13～16
 ピリピ人への手紙 2章 12～13、3章 12～16、4章 8
 テサロニケ人への手紙第一 1章 3～4
 テモテの手紙第二 2章 15、4章 1～5
 ヘブル人への手紙 5章 14
 ペテロの手紙第一 2章 2～3、3章 15
 ペテロの手紙第二 1章 5～9、3章 17～18
 ネハネの手紙第一 2章 14、5章 6

神の教会改革運動は、最初から、ある特定の「真理」だけでなく、神のことに含まれているすべての真理を、全面的に受け入れてきました。この幅の広い、理想的目的は、1878年にダニエル・S・ウォーナーが「生ける神の使徒的教会」を建てるために、「聖さと、すべての真理を結び付けるという新しい使命」を神が彼にお与えになったと感じたという言明によって明らかにされました。「すべての真理」を知り、実行するという情熱は、この運動のそれ以後の歴史の特徴となりました。このような立場はいろいろな意味や副産物を生み出しました。

まず、第一に、開放的な心を養います。開放的な心は、これから発見し、把握されるべき真理がまだ多くあることを、予測しています。その結果、霊的真理のあらゆる面を理解し、それを適用することにおいて、成長でき、また成長しなければならないという期待をしています。第二の副産物は、キリスト教会が、真理を真剣に求める人々の共同体となる、ということです。それは、承認された信条という形で与えられた、「公的な」キリスト教信仰の内容を持っているというのではなく、聖書全体を指し示めされ、「あなたは霊的真理をこの鉱山から掘り出しなさい」と求められているのです。このように、すべてのキリスト者には、いのちと救いに関するこれらの真理を求め、発見する責任が負わされています。使徒パウロは、ピリピのキリスト者達に勧告し、「恐れおののいて自分の救いを達成してください」（ピリピ2章12）と述べています。真理であることも、それが自分のものとならない限り、その人にとって少しも意味がありません。真理を学ばなければならないのはもちろんですが、それと同時にその真理がその人のものとなり、自分の経験の一部とならなければなりません。

すべての真理を受け入れることのもう一つの副産物は、ある信仰の解釈に関しては、ある程度仮説としての余地を残しておくということです。一特に、異なるキリスト者のグループによって種々の異なる解釈がなされているものに関してはそういう余地を残しておきます。このように多くの異なる意見が乱立しているときには、堅実な基盤に立っていると思われる見解に到達するのが時には困難なことだからです。ある人々はこの立場はあまり好きではありません。なぜなら、彼らは何を信じるべきかを、他の人から教えてもらう方がよいと思っているからです。ある問題に関しては一時的に外部の権威に頼っていることも良いでしょう。人の生活や運命を導く基本的な確信としては、自分で開発した神学に代わり得るものではありません。これは容易なことではありません。自分の神学を探求するのが容易であろうとなか

ろうと、それが最上の方法なのです。一生涯を通じて真理を探求することに何かの役に立つものとして、次の七ヶ条の指針がありますが、これはキリスト者が成長するために絶えず緊張を保って生活していかなければならない場合に役立ちます。

1. 霊的成長のために必要なものを受容する

「聖め」の伝統の中で長く教育を受けた人は、信仰の面でキリスト者が成長しなければならぬ必要性に、十分注目していくことを怠りがちです。聖めの経験や、キリスト者の完全に関する聖書の教えが、非常に強調されてきました。このことが、信仰と行為に関して「成長する」ことに絶えず注目していくことが同様に重要であるということ、軽視する傾向を生み出しました。

新約聖書の著者の中では、ペテロが、霊的成長の強力な唱道者として浮び上がって来ます。このことは、おそらくペテロ自身が、以前根強く持っていた確信を変えることによって、「成長」する必要性に直面したからです。キリスト者の交わりの中に異邦人も含めるという問題（使徒10、15章）はその良い例です。このように、彼の書簡には、キリスト者は成長することが必要であるということが、きわめてはっきりと語られています。彼は小アジア全体の教会に対し、「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。あなたがたはすでに、主がいつくしみ深い方であることを味わっているのです」（Iペテロ2章2～3）と書き送っています。第二の手紙では、すべてのキリスト者に宛てて、「無節操な者たちの迷い」に対する警告として、「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい」（IIペテロ3章18）と強く勧めて締めくくっています。

それより前に、ペテロは、信仰に基礎を置き、まだ若い教会に対してなされるあらゆる新しい攻撃に対して注意を怠らないようにと、熱心に勧めた、その背後にある主な目的を明らかにしています。その目的は、単に自分自身の安全のみならず、伝道のための証にも関連がありました。ペテロは「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい」（Iペテロ3章15）と勧めています。これが出来るためには、常に新しくされた、十分に成長した信仰が要求されます。そうすることによって、福音を歪めたり、キリストへの信頼を損うすべての者達の議論にも答えることができるのです。恵みと知識の両面で成長することが大切です。

2. キリストに焦点を当てる

霊的成長のためのいかなる計画にも、ある特定の目標と、目的を明らかにする必要があります。キリスト者にとっては、この点に関して、事実、唯一の選択しか残されていません。エペソ人への手紙の著者は、「私たちはみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達」（エペソ4章13）しない限り、この目的は達成されないと言っています。彼はさらに、この目的の範囲は、「愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達すること」（15）にまで及ぶと述べています。キリストこそ、私たちが見習うべき模範なのです。

最初は、このような目標は、非現実的だと思われるかも知れません。「キリストの満ち満ちた身たけにまで達する」とか「あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達する」という聖句を見ると、これは不可能な理想を示していると思えるかも知れません。しかし、イエス御自身は、神であられたのと同様に、人でも

あられたということを思い起こさなければなりません。誘惑との長く、根強い戦い、特にゲッセマネの園の苦悩に満ちたイエスの姿、あるいは、十字架上で見捨てられたときの苦しみに満ちた叫びをあげるイエスの姿を見なければなりません。イエスは困難な道を選択することも強いられました。最も親しい者から拒否される苦しみも知っておられました。イエスが、神から託された目的を達成することが出来たのは、人として、責任ある成長した者であったことを示されたからでした。すべてのキリスト者は、この同じ点に立たされています—すなわち、自分の人生のために与えられた、神の御旨を達成するように挑戦を受けているのです。

理想としてのキリストに注目することの意義は、たくさんあります。それは本当に重要なものに注目させます。多くの人々は、神学的流行、ある特殊な教理を強調する人、興味ある些細なこと、新興宗教にさえも、心を奪われてしまいます。エペソ人への手紙の著者は、このような人は、「子ども」なのであり、「人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりする」（エペソ4章14）者であると述べています。キリストに注目していると、「正しい道」に留まることが出来、安定した信仰を保つことができます。したがって、キリストに似ることは、魅力があり、他の人にも伝わって行くものであって、神の愛が、私たちの人生に、どのように働かれるかを示す、生ける証人と私たちをさせ得るものです。キリストを中心とすることにより、私たちの生活や思索の重要な面も、キリストに次ぐ次元で、正しい位置を占めるようになります。厳密には、キリストを生活のあらゆる面で模範とするときのみ、私たちはキリスト者と呼ばれ得るのです。キリストが中心にならなければなりません。キリストに似ることは、不可能ではなく、むしろ成長する余地を十分に与えるものです。

3. 生存のための努力

いかなる種類の成長も、自動的に起こるわけではありません。意図的に力を投入し、適当な環境を備える必要があります。肉体の成長は、十分に適切な食物と、水が与えられ、極端な気温から保護され、生き残るために他の外敵から保護されることを、必要としています。同様に、霊的成長も、栄養と、励ましを必要としています。この栄養は、主として、聖書の学びと、その実行から生じます。励ましは、主として教会や、他のキリスト者から与えられるものです。一強い者は、弱い者を励まし、信仰において成熟したものは、新しい信者を励ますのです。ここで注意しておいた方が良いのは、霊的栄養は、それを受けている人に適切なものでなければならない、ということです。ヘブル人への手紙の著者は、彼の読者が霊的成長を怠っていると叱咤して彼らは依然として「堅い食物」よりも、「乳」を飲んでいる段階であると言っています。「また乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼児なのです。しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です」（ヘブル5章13～14）と彼は述べています。このように、霊的食物も、成長するに従って、肉が増してこなければなりません。

若いテモテに宛てたパウロの書簡には、霊的成長を促がす、数々の激励が見られます。まず、パウロは、テモテとの関係を示して、「そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい」（Ⅱテモテ2章1～2）と述べています。注目しなければならないのは、テモテも、「信頼できる人 *reliable men* (NIV訳)」に教えなければならないと言われている点です。

それによって、教えられた人々が、さらに、他の人々に教えることができるためです。このように、すべてのキリスト者は、他人から霊的食物を与えられると同時に、他人にも霊的食物を分け与えることが必要です。

成長について、パウロは、テモテをもっと詳しく指導しています。「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい」（15）と述べています。ここでも、パウロは、霊的成長の主な源泉は神のみことばである、という中心的真理を明らかにしています。パウロはまた、熟練した働き人は、「真理のみことばをまっすぐに説き明かす」人であるという事実を強調しています。このような熟練した者となるためには、みことばを学ぶ必要があります。このような学びは正規の学校—大学、神学校、大学院—での学びを通して也得られます。また、テモテの場合のように、有能な個人的教師の下でもこのような学習はできます。種々の神学書や注解書の助けを借りて、熱心に独学することによっても得られます。いずれにしろ、キリスト者の成長は、この基本的な霊的食物—すなわち、みことばを必要としています。このような学びの後、パウロはテモテに対して、「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても」（Ⅱテモテ4章2）と語っています。

成長のための栄養のもう一つの源泉も、テモテに示唆されています。「私か言っていることをよく考えなさい。主はすべてのことについて、理解する力をあなたに必ず与えてくださいます」（2章7）。祈りによる瞑想は、聖霊が私たちをより深い理解へと導いてくださる一つの手段です。学問的学びと同時に、聞いたり、読んだりしたことから深く思うことは、霊的にすばらしい栄養となります。それによって、その意味は深められ、みことばはさらに広い範囲にされるようになります。

4. 歴史上のすぐれた人物との交流

聖書の学びを基本として継続するかたわら、他にも教えられ、視野が拡大され、啓蒙を受け、刺戟されるための価値のある源泉に目を向けることができます。真理を追求するのに、最初から始める必要はありません。今日の問題のほとんどは、以前にも直面したことのあるものでしたし、その中のあるものは解決済みのものです。すでに征服されている敵と戦う必要はありませんし、過去の過ちを繰り返すのは、まったく愚かなことです。賢い人は、人類の経験や野望の広い分野を探求し、それを自分の成長のための栄養として、用いています。

この蓄積された英知を十分に利用するためには、世界の人類と文化の歴史や、自分の民族や、他の民族の歴史、特にキリスト教の歴史を学ばなければなりません。この二十世紀間、真理のたいまつを絶えず燃やし続けてくれた人々を知り彼らを一に評価することは重要です。エイレナイオス、アタナシオス、アウグスチヌス、トマス・ア・ケンピス、ルター、カルヴァン、フォックス、ウェスレイ、ウォーナー、ハイラム、ティリッヒ、他にも多くいますが、枚挙にいとまがないくらいです。これらの人々とその著書を通して出会い、それに応答し、再評価していく必要があります。過去の最もすばらしい思想家達と対話することによって、自分の思想も試され、深められて、強化されます。

使徒パウロは、私たちが自分の意見の評価を検討し、読んだり聞いたりしたことを再評価するための、価値ある示唆を与えています。ピリピ人への手紙の中で、彼は次の規準を示しています。「すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのような

ことに心を留めなさい」(ピリピ4章8)。もし、以上の特質があるならば、聞いたり、読んだりしたものは、知的および霊的益のために用いることができます。この基準に合致しないならば、退けなさい。しかし、自分と異なる意見から多くのことを学び得ることも覚えているべきです。たとえば、パウロは、自分の書いたものにだれもが同意することを望んでいましたが、皆が必ずしも同意するとは限らないことも知っていました。「もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください」(ピリピ3章15)と述べています。

5. 聖書の御導きに従うこと

信仰が成長することを期待する心の根底には、聖霊は絶えず私たちをすべての真理に実際に導いてくださるといふ、重要な概念があります。イエスの約束(ヨハネ16章13)を受け入れる人々は、神が聖霊の働きを通して、神を求める人達に、啓示の道を開いてくださると期待するのです。神は、歴史のある時期に、その創造に関するすべての神の真理を、ある意味において、一度に啓示されたと考えられるべきではありません。真理そのものは変わりませんが、神は常に人類の歴史に介入され、応答しておられます。人間の自由意志による決断によって生じた変化して行く状態や状況や問題に対する旧約聖書における神の応答を考えてみましょう。このことは真理が過去において、聖書と歴史によって啓示されたことともに、聖霊を通して、現代にも関連がある点があることを意味しています。

使徒ヨハネは、聖霊が真理を伝達する方であるのみならず、真理そのものであると語っています。「あかしをする方は御霊です。御霊は真理だからです」(Iヨハネ5章6)。このように、聖霊が真理と同一視されていることは、恐るべきことであると同時に興味をそそることです。なぜなら、前にも述べたように、聖霊は単に私たちと共におられるだけでなく、私たちの中に住むために来られるからです。このことは、私たちのためになぐさめ主が常におられるということです。これはまた自分の神学を経験によるものに変えてくれます。これは、神が今でも、人間の出来事と神の民の生活の中で働いておられるということの意味しています。あらゆる環境や問題や出来事に対して自分の信仰を用いることによって、御霊の導きが得られるのです。もし私たちが、このような導きに心を開いているならば、神の真理が絶えず啓示されるのです。

神と人々との間の関係の頂点は、イエスが弟子達に約束されたことがらによってりっぱに示されています。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためです。その方は、真理の御霊です」(ヨハネ4章16～17)。「いつまでも」という語は、現在も、将来も、すべての時を含んでいます。

6. 経験の上に建てる

成長には、自然の順序があります。基本的なことは上級へ進む前に完全に学んでいなければなりません。私たちは子供からおとなへ、初心者から経験ある専門家へ、新しい回心者から、成熟したキリスト者へと成長の段階を一つ一つ踏んで行かなければなりません。前に述べたことがらに助けられて、一段一段上へ上って行くのですが、成長において、最も重要な要素は、その実際的内容、すなわち、個人的経験です。なにか新しいことをした時の成功や失敗の経験は、成熟へ向かって進歩するのに大変役立ちます。これは他の分野での成長と同様に、霊的成長においても

言えることです。

既述した、ヘブル人への手紙において、「乳」から、「堅い食物」へ進歩するようと言われていたことは、このような霊的進歩が必要であることの一例を示しています。堅い食物は、成熟した人達のためのものであり、そのような人々には、乳はもう必要ではありません。同様に使徒パウロも、彼自身が経験によって成長したことを次のように書いています。「私が子どもであった時には、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました」（Ⅰコリント13章11）。このように成長とは、以前の理解を後にして、もっと成就した考えへと進むことです。なにを後にし、なにを新しく加えるかの基準になるのが、経験なのです。

使徒ペテロは、一つの霊的経験から、次の経験へと意図的に前進するための一つの公式を示しています。「信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません」（Ⅱペテロ1章5～8）。パウロは、このような経験に基づく公式に加えて、「私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです」（ピリピ3章16）と述べています。

7. 進歩への期待

成長して行く信仰には、常に、期待する態度が伴うものです。一すなわち、新しい洞察力、新しい機会、福音の新しい適用、新しい決断、新しい証と奉仕の方法などです。使徒ヨハネが書いているように、「神のみことばがあなたがたの内に生きている」（Ⅰヨハネ2章14。NIV訳）とを感じるようになると、期待感と冒険心が心に溢れるようになります。私たちの神学も躍動し始め、多くのことを教えてくれるようになり、私たちの心を感動させると同時に、いろいろなことを示してくれます。頭脳を刺激すると同時に、心を興奮させてくれます。あすは変化が起るかも知れないことを知っていても、不安や、あやふやな感じを持つことはありません。私たちが立っているところは確実で、しっかりした所です。しかし、一段高い階段へ上るという挑戦は、どんな時にも存在しています。

成長する信仰は、キリスト者の生活の他の面にも成長をもたらします。パウロはテサロニケ教会の人々をほめて、次のように言っています。「あなたがたの信仰が目に見えて成長し、あなたがたすべての間で、ひとりひとりに相互の愛が増し加わっているからです」（Ⅱテサロニケ1章3）。「信仰が成長すれば愛も成長する」という公式は何とすばらしいものでしょう。それは、同情に満ちた関心から愛の行いへと人を成長させます。それはまた、一連の神学的主張を守ることから、生活の中に生きている信仰と人々と分かち合える信仰へと成長させます。信仰を保持することから、行動せずにはおられない確信へと成長させます。

成長する信仰のすばらしさは、自由の感覚によってさらに高められます。イエスは、当時のユダヤ人に、彼の教えを受け入れ、弟子となるように勧められました。「そうすれば、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします」

（ヨハネ8章32。NIV訳）と約束されました。イエスは、キリスト者の信仰は自由を得させる一すなわち、過去の罪から自由にされるのみならず、伝統、人の意見、律法主義という束縛する力からも解放される一と語られました。キリストにあって、私たちは自由に成長できますし、成長するよう期待されています。

8. 生涯にわたる旅と探求

キリスト教の神学は、だれもが入学しても、「完了していない」大学のコースのようなものです。それは一種の旅であり、目的地ではありません。だれでも「とうとう着いた」と言うことはできません。パウロさえ、彼の生涯の終り近くになって、「私は、ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕えたなどと考えるはけません」（ピリピ3章12～13）と述べています。パウロにとっても、私たちにとっても、キリスト者の信仰は、絶えず探求して行くものであり、単なる一つの発見にすぎないものではありません。私たちが既に知っていることに堅く立ちながら、神の真理をさらに求め続けることを決してあきらめてはなりません。神のみことばをもっと理解できるよう求め続け、神が私たちになにをなすことを求められておられるかを、追い求め続けるのです。そうすれば、私たちはパウロとともに、「キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです」（ピリピ3章14）といふことができます。成長して行く神学は、私たちをして「追求」させるもの—すなわち、神の上に召してくださる召しに答えさせるものです。

この「継続し、上昇していく」探求の結果は、整然とした組織的神学ではないかも知れませんが、それは、躍動する信仰、讃美する信仰、慰める信仰、日曜日と同様月曜日にも生きている信仰、決してくじけることのない強い信仰となるでしょう。それは柔軟であり、異なる意見の兄弟姉妹をも受け入れる信仰です。それは心の中で燃え、手や足を用いて奉仕に励み、心から献金し、出て行って、主のわざを行なわせる信仰です。

しかし、このように爽快な経験は、私たちが「一定の固定した信仰」のみを考え続けるならば、決して味わうことができないでしょう。それは個人的な、「私の信仰」にならねばなりません。「恐れおののいて」努力しているのはこの私の信仰です。その時、神が私のうちに働いて「みこころのままに、・・・志を立てさせ、事を行なわせてくださる」（ピリピ2章12～13）のを知ることができるのです。

（完）